

# 起きなかつた脱魔術化

——メノナイトとアーミッシュの反近代史——

踊 共 二

はじめに

一六世紀のドイツに始まる宗教改革は、近代世界の形成に寄与した世界史上の画期とされている。とくに注目されてきたのは、ルター以後の幾多の改革者たちが「個人」の内面的信仰を重視したこと、そうした個人からなる「自発的結社」としてのセクト（ゼクテ）を数多く誕生させたこと、その過程でデモクラシーの推進に貢献したこと、修道士に代表される達人的宗教者の理想像を打ち壊して現世に生きる「職業人」としての信徒の生活に高い宗教的価値を与えたこと、そして何よりも「脱魔術化」(Entzauberung)を推進して近代的・合理的な精神を育んだことである。プロテスタント諸派はキリストの体と血への「実体変化」を伴う(とされる)カトリックのミサ聖祭(秘跡)を悪魔的な儀式とみなして廃止し、それぞれのやり方で非魔術的な聖餐式(主の晩餐)を導入した。洗礼式からも秘跡的要

素は排除された。その他の秘跡（聖餐と洗礼以外の五つ）や数多くの宗教行事、聖人崇敬も廃止ないし縮減された。それは宗教の領域における「合理化」にほかならず、政治・経済・社会における全般的な近代化の前哨戦であったと考<sup>①</sup>えられている。

この宗教改革と近代化のナラティヴを（部分的にせよ）受け入れる人は今日においても少なくないであろう。宗教の領域で合理化が起きる一方、科学技術が宗教と魔術から解放され、国家権力が宗教を必要としなくなり、人々が超自然的な力ではなく計算可能性（Berechenbarkeit）を最重要視するようになったときに「世界の脱魔術化」（Entzauberung der Welt）が完成する。マックス・ヴェーバーはそう考<sup>②</sup>えていた。魔術と黎明期の科学の関係を考察する研究者のなかには、この歴史の進展の方向性を再確認し、魔術の無意味化を論じる者もいる。たとえばアメリカの近世史家スティーヴン・マローンは、最終的に現代人にとって信仰は散発的・一時的な関心の対象と化し、魔術はジョークか暇人の遊びになり、もはや（高度な）宗教と（低級な）魔術との区別さえ意味をなさなくなったと論じている。<sup>③</sup>

本稿の考察対象である再洗礼派は宗教改革の「最左翼」であり、中世カトリック教会の魔術的儀式（秘跡）を徹底的に批判し、西欧世界において長く崇拜の対象となっていた聖画像もいっさい認めなかった。彼らはミサ聖祭の聖体拝領に替えて聖書の伝える素朴な「パン裂き」（Brobrechen）を導入した。幼児の祝福と悪魔祓いを伴う旧来の洗礼式は、彼らのもとではキリストを信じることを自由意志で表明する個々の成人による信仰の証言と位置づけられた。事実上それはカトリック教会で無自覚に受けた幼児洗礼を否定し、あらためて実施する「再洗礼」であった。ともあれ、これらの行事にはいっさい超自然的な要素はなかつた。<sup>④</sup>

ところで、再洗礼主義を奉じる諸分派はスイス（チューリヒ）およびドイツに複数の起源を有し、改革路線も多様

であつたが、トーマス・ミュンツァーの影響を受けたハンス・フートのグループやミュンスター千年王国の担い手たちのように暴力的傾向を示すものが耳目を集めたため、カトリックからもプロテスタント正統派からも激しく迫害された。一七世紀前半には死刑は執行されなくなるが、逮捕・投獄・拷問・棄教の強制・再逮捕・領外追放・ガレー船送りなどの弾圧政策は長くつづいた。もつとも執拗に迫害を行ったのはスイスのベルン市当局であり、一八世紀前半に諸外国から非難を浴びたほどである。今日まで生き延びている再洗礼派は、無抵抗・分離主義の路線をとつたオランダ系のメノー派（オランダ・メノナイト）、彼らと一七世紀以降に連携・合流したスイス系再洗礼派（スイス・メノナイト）、スイス系再洗礼派の内部対立の過程で一六九三年に生まれた厳格派アーツシユ、モラヴィアで勢力を築いたフッター派（ハッターライト）である。なおアームツシユの母体は厳密にはアルザス・西南ドイツ・スイスにまたがって暮らす再洗礼派であり、彼らはスイスドイツ語を母語とする同郷者の集団であつた。当時このグループにおいてはオランダ・メノナイトの『ドルトレヒト信仰告白』（一六三二年）の受容が進んでいた。ただし反対者も残つていた。アームツシユの名は最初の指導者のひとりヤーク・アマンに由来するが、彼はベルン農村部ジンメンタール出身で、スイスとアルザスの亡命地を行き来しながら『ドルトレヒト信仰告白』の求める厳しい「破門」の実践によつて教会の引き締めを図つた人物である。メノナイト、アームツシユ、ハッターライトはやがて北米にも渡つて独自の発展を遂げ、現代に至る。それらの運動には多様性があり、財産共有を実践するハッターライトと私有財産を擁護するアームツシユとの違いは大きい。しかしながら、洗礼論・聖餐理解・教会観・国家権力観は基本的に同じである。<sup>5)</sup>

ヴェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（一九〇五年）のなかでピューリタン系のセクトだけでなく再洗礼派にも注目し、みづから主体的に信じる「諸個人の新しい団体」（すなわち Believers' church）を形成した彼らは既存の教会の中世的な文化や生活様式を清算して徹底的な「脱魔術化」を推進したと論じている。

ヴェーバーによれば、この世の悪を憎む再洗礼派は強い「現世回避」の傾向をもち、政治に関与せず、忠誠誓約も兵役も忌避したが、現世の営みから切断された修道生活や隠棲を原理的に認めてはいなかったため、ピューリタンと同じように現世の職業生活に励みつつ宗教的理想を追求する「世俗内的禁欲」に向かうほかなかった。<sup>6)</sup>

エルンスト・トレルチもまた、個々人の自発的意志によって形成された（スイスのチューリヒに発する）セクトないし自由教会（Freikirche/free church）としての再洗礼派共同体のあり方に「近代性」を認め、オランダ・メノナイトの市民的成長と経済的繁栄の歴史にも言及している。<sup>7)</sup> ヴェーバーとトレルチの影響力は絶大であったが、二〇世紀後半以降の実証研究が再洗礼派自由教会説や平和主義説を相対化し、個人の意志を抑圧する集団主義や暴力的・権力的傾向の残存、再発の諸相を明らかにするなか、いまや神通力を失いつつある。しかしながら、再洗礼派とくにヴェーバーやトレルチが注目するスイス系再洗礼派やオランダ・メノナイトが「脱魔術化」の推進者であったことを疑い、事実を明らかにしようとする研究者は皆無に等しい。むしろ傾向はその逆である。イギリスの近世史家スチュアート・クラークはトレルチ説を下敷きにし、国家教会（キルヘ）はあらゆる「不純分子」を包摂するため悪魔崇拜・魔女信仰・魔術が一般社会に与える脅威に対して敏感であったが、諸分派（セクト）は選ばれた少数の聖徒の共同体をめざすがゆえに現世にはびこる邪悪な因習や魔術を取り締まる必要を認めなかったと述べ、再洗礼派こそ後者の好例であると論じている。<sup>8)</sup>

しかし本当にそうであろうか。再洗礼派はそのように首尾よく「脱魔術化」を達成したのであるうか。本稿の目的は、現代まで存続する再洗礼派の中心勢力であるメノナイトおよびアームッシュュがどれほど魔術ないし魔術的世界観を脱しているのかいないのか、彼らの移民先であるアメリカの現代の諸事例をまず検討し、遡ってスイス・西南ドイツ・フランス東部その他の亡命地における過去の歴史を再吟味し、脱魔術化論・近代化論の問題点を実証レベルで明

らかにすることにある。なお本稿ではスイス系再洗礼派（スイス・メノナイト）とアーミッシュを考察の中心に据えるが、その理由は彼らに關してはヨーロッパ時代および北米移住後の時代の両方について行政文書や内部的資料（口承を含む）が豊富に残っており、部外者による訪問記、対話の記録、文学作品なども少なくないからである。ただし再洗礼主義諸派には協力関係や競合関係があり、そもそもオランダ・メノナイトとスイス系再洗礼派を切り離して論じることはできない。モラヴィアのフッター派とスイス系再洗礼派のあいだにも深い人的交流があった。そのため本稿においては、それらの分派についても必要に応じて言及することになる。

### 一、現代アメリカの奇跡と魔術

(一) 『ホームズパン』から

この書物は現代アメリカのメノナイトとアーミッシュの女性たちのエッセイ集である。編者はロリリー・クレイカーというミシガン州在住の作家である。彼女の父親はスターリン時代の大粛清によってウクライナのドイツ系メノナイト定住地を追われてカナダに逃れた経歴の持ち主である。エッセイ執筆者には、近代文明を敬遠してランプと馬車を使いつづける保守派のオールドオーダーアーミッシュ (Old Order Amish)、黒色で簡素であれば自家用車の所有と運転を許可するビーチアーミッシュ (Beachy Amish)、近代市民社会にはほほ順応するメノナイトが含まれている。この本に収録されている三七編の短い文章からは、現代に生きる再洗礼派の内面および行動の特徴がはっきり読みとれる。聖書の信仰、家族愛、隣人愛、共同体主義、儉約・謙遜・勤勉の精神などである。くわえて「奇跡」への素朴な信仰も確認できる。ミズーリ州に住むメノナイト女性キャサリン・ガシヨは、自宅前の道路をひとりです

いて渡ろうとする幼い娘が自動車に轢かれそうになりながら奇跡的に助かった体験を記し、聖書（詩編）を引きながら「神を信じる人は天使に守られ、助けてもらえる」と繰り返して述べている。<sup>9)</sup>モンタナ州のメノナイト、ケイティー・シュロックも「天使」を信じている。彼女の体験談によれば、子どものころ自宅に数名の強盗が入り、ベッドで眠る彼女（と妹）のすぐそばまでやって来て顔を覗き込んだにもかかわらず不思議なことに彼らは何もせずにそのまま立ち去ったが、それは信仰深い父母の切なる祈りによって「わたしたちの守護天使」(our guardian angels) が降りてきて守ってくれたからに違いないという。<sup>10)</sup>ピーチーアーミッシュのシェリー・ゴアは、感謝祭の日、三人の娘を連れて中西部からフロリダ州のアーミッシュ居住地サラソータの実家に自動車で帰る途中、エンジントラブルに見舞われ、ジョージア州南部のあるトラック運送会社の営業所の真ん前で停車してしまった。そこにはたまたま、身なりから判断してメノナイトだとわかる男性がおり、次の仕事の指示があるまで待機しているところだった。それが運転手としての最後の仕事で、その後は建設業界に転職する予定だという。彼の名前はトロイ。故障したケイティーの車に歩み寄り、「神があなたたちを助けるようにわたしをここに足止めさせておられたのかもしれない」と告げた。「四時間前からわたしも神に助けを求めて祈っていたのです」とケイティーは答えた。トロイは動かなくなった自動車を近くの修理業者に託し、ケイティーたちを食堂に招き、さらに宿をとってあげた。トロイはサンドイッチの代金と宿代を払ってくれた。「妻に電話して足止めの理由は神が人助けをわたしに命じたからだと話すよ」。そう言いながらトロイは去っていった。ケイティーは部屋で感謝の祈りを捧げた。困ったことに所持金は四五ドルしかなかった。翌日修理工場のガレージに行くと、オーナーは言った。「修理代はとれないよ。何か強い力が働いている感じなんだ。ただしレッカー代はいただくよ。うちにはレッカー車はないから別の業者に頼んだんだ。代金は四五ドルだよ」と。ケイティーは奇跡が起きたと確信しながら代金を支払い、娘たちと車に乗り込んだ。不思議なことにガソリンは満タン

だった。そこにトロイが現れて元気に声をかけた。「万事うまくいったんだね。ところで今日ボスがわたしに次の仕事をくれたんだが、いつもよりたくさん荷を積むから報酬は倍なんだ」と。二人にとってそれは最高の感謝祭だった。<sup>11</sup>

メノナイトやアーミッシュは奇跡と天使の存在を信じている。彼らには神が具体的な意志ないし計らいをもってこの世のすべての出来事を支配しているという信念がある。それは後述するように彼らが父祖たちから受け継いだ人格神への深い信仰に根ざしている。たとえば幼い子どもへの死にも計り知れない神の意志が働いており、人間には事実を受け入れるしかないと彼らは考えている。オハイオ州に住むメノナイト、エルヴィーナ・ヨーダーは息子を死産した経験<sup>12</sup>を記し、次のように述べている。

神には過ちも事故もありません。神は地上のあらゆることを統べておられます。「・・・」主が息子の命を奪ったとは思いません。わたしたちにはわからない理由で、その命が奪われることを許されたのだと信じています。それがわたしたちのためになるような神の計らいがあると信じています。「・・・」神の主権 (God's sovereignty)こそわたしたちの心の平安の源なのです。<sup>13</sup>

(二) 『ファミリーライフ』から

ペンシルヴァニア州ランカスター郡でアーミッシュと一般の人々の交流事業を運営しているブラッド・イゴウは二〇一九年、オンタリオ（カナダ）のオールドオーダーアーミッシュ系の出版社が刊行する雑誌『ファミリーライフ』に寄せられた投稿文を集めた本を出した。そこには、上述のエルヴィーナ・ヨーダーと同じ経験をしたオンタリオ在

住の女性から送られてきた次のような匿名記事が載っている。「いったいなぜ? そういう疑問がいつも沸いてきます。しかしわたしたちは、人生のなかで起きるすべてのことを理解できると思い込んではいけません。神が時期を定めておられるのだから、疑問符をつけてはならないのです」。また以下のような記事もある。「ラマール・リン・ディーナーは五歳でこの世を去って天国に行きました。彼は選ばれた少数者のひとりです。悪を行う誘惑を一度も経験せずに済んだのです。彼はこの世を去って天国で歌っています。ぼくたちを少しでもイエスの近くに連れて行くために。両親と姉妹たちは悲しんでいます。ぼくは「弟の」ラマールが天国に行けたことを喜んでいます」。ジェイク・ディーナーの署名のあるこの記事にも、神の「計らい」を信じるアーミッシュの伝統的な信仰が滲んでいる<sup>18)</sup>。

こうした信仰はすでに一六世紀の昔から、スイス再洗礼派のあいだで確認できる。たとえばベルン農村に住むある再洗礼派の家族の記録には、一五八一年に生まれた子ヤークコブがその年のうちに死亡し、八三年に生まれた子に同じ名前をつけ、同年に妻バーベリに先立たれ、二人目のヤークコブも亡くし、翌年に神の恵みによって亡き妻と同じ名前の後妻を迎え、その翌年に娘が生まれて妻と同じバーベリという名前をつけ、一五八七年に息子が生まれてまたヤークコブと名づけ、翌年に娘スザンナが生まれたが神の意志でその命がとり去られ、一五九一年には妻バーベリも死去するが、一五九三年に三番目の妻エルスと結ばれ、翌年に娘が生まれ、神

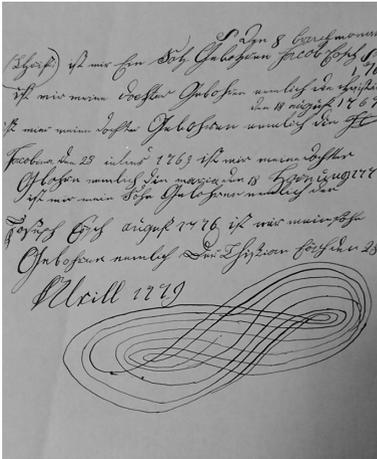


写真1 18世紀後半のペンシルヴァニアのエッシュ家の家族の記録。6人の子どもの名前と誕生日が聖書のブランクページに淡々と記載されている。没年は記されていないから、この時点では全員が生存していたのであろう。オハイオ州ホームズ郡のアーミッシュ史家リロイ・ピーチャー氏所蔵。筆者撮影（2017年）

を讀えながらバーベリと名づけたと記されている。<sup>14</sup>この再洗礼派信徒は、生と死が隣り合わせの暗い時代において、ひたすらに神の計らいを信じ、家族の生と死の記録をつけていたのである。同じような手書きの家族の記録 (Family record) は、アメリカに渡った初期のアーミッシュ移民のあいだにもみられる (写真1)。

(三) 脱会者レベッカ・ボントラーガー・グラバーの手記から

神の意志や摂理への信仰はもちろん魔術的ではない。魔術とは特定の儀式や呪文をつうじて何らかの超自然的な存在に呼びかけ、安全や豊作や健康 (病氣平癒) や幸福といった現世的物質的な利益を引きだす行為であり、神 (あるいは神々) に対する崇拜や感謝を本質とする「宗教」とは区別される。ヴェーバーによれば魔術の正体は現世的な目的のための「神強制」(Gotteszwang) であり、一方的な奉仕や感謝や切願を本質とする「神礼拝」(Gottesdienst) とは異なる。前者には多神教的傾向が潜んでいるが、後者は絶対的な唯一の神への信仰を前提としている場合が多い。ただしヴェーバーもいのように、魔術と宗教、神強制と神礼拝、さらには民間の魔術師 (呪術者) と公の聖職者 (祭司) の境界はしばしば曖昧である。カトリックのミサ聖祭はそもそも魔術的であり、ロザリオなどの信心具にも呪物の要素がある。<sup>15</sup>信徒たちが教会の聖水を持ち帰り、家や納屋や家畜や畑に散布して「無病息災」を祈る行為はいわゆる「準秘跡」(sacramentals) と位置づけられるが、<sup>16</sup>ここにも明らかに魔術の要素がある。はたして現代の再洗礼派は、こうした魔術の要素を一掃してであろうか。

一九九〇年代、ミズーリ州出身のレベッカ・ボントラーガー・グラバーは、モンタナ州のウエスト・クートネイのオールドオーダーアーミッシュ共同体のビショップ (監督) を務める夫とともに、教会の古い規則 (オールドヌング) の改革と聖書主義的信仰の再確立を試みた。しかし夫妻は守旧派によって一九九〇年代に破門されてしまう。レベッ

カは二〇一七年に手記を出版するが、そこにはアーミッシュの魔術に関する興味深い体験談が含まれている。彼女は子どものころ、七歳になる前、アイオワ州の祖父の家を訪ねたとき、伯母たちに伝統的な民間医療であるパウワウ(Dowwow)の力を授けられが、その方法はモグラを両手に持ってそれを死なせるといふ不可解なものであった。その後レベッカは超自然的な治療を行うことができるようになり、たとえば泣く子を自分のお腹におしつけると大人しくなったり、耳の痛みを訴える人の耳に手を当てると痛みがとれたりしたという。しかしその後、レベッカは悪夢にうなされるようになり、窮地を脱するために次のように祈った。

愛する神さま、これからわたしは眠りにつきます。私のもとに天使を遣わし、わたしの心を見守るために、ベッドの脇に立たせてください。わたしの心が天国にいるように清くなりますように。アーメン。<sup>17)</sup>

すると心は晴れ、悪夢を見ることはなくなったという。その後レベッカはアーミッシュのさまざまな旧習に批判的になり、夫とともに外部から来た福音派の宣教師たちと意見交換を行うようになるが、そうした機会にアーミッシュとメノナイトの世界には迷信的で邪悪な慣習が残っていると指摘され、彼女自身もっているパウワウの力を棄てる決意を固める。レベッカは、あの日モグラを手のなかで死なせたとき、彼女の魂のなかに入り込んだに違いない悪しき霊(demonic spirit)を追い払うために祈った。「イエスの名においてわたしは命じます。あらゆる悪しき霊と闇の力はわたしから出ていきなさい」と。この祈りのあとレベッカはパウワウの力を失ったが、心は喜びに満たされたという。<sup>18)</sup>ところがレベッカには神秘的な力がまだ残っており、家族が一齐にひどい熱病にかかったとき、夫とともに心不乱に祈って癒しをもたらすことができた。そのさいレベッカはアーミッシュの守旧派が「呪い」をかけていると

直感してこう祈ったという。

天の父よ、わたしたちはあなたの子どもです。あなたはわたしたちのことを気にかけて、何か悪いものを与えようとはなさらないことをわたしたちは知っています。ですからわたしたちは、イエスが十字架上で流した血の力によって悪魔にあらがひ、病もろともここから去るように命じます。主よ、わたしたちはあなたから出たもの以外はいつさい受け入れません。イエスの名においてわたしたちは、だれかがわたしたちにかけたどのような呪い (curse) も打ち破ります。<sup>(19)</sup>

この現代アーミッシュ女性の手記は衝撃的である。二〇世紀前半以降にパウワウの風習はアーミッシュ社会の内部でも批判され、衰退したと言われてきたからである。<sup>(20)</sup> レベッカは明らかに宗教と魔術の境界を行き来している(そうした区別が有意義であれば、だが)。特定の現世的な目的を達成するための「呪文」(Beschwörung/charm)と全能の神に助けを求める「祈り」(Gebet/prayer)の線引きはときとして容易ではない。ところでパウワウとは北米先住民の集会や呪術的行為を広く指す単語であり、ドイツ語を母語とするアーミッシュやメノナイトの移民たちの「奇習」を外部の英語話者たちがそう呼んだことに由来する。なおパウワウはペンシルヴァニアのドイツ語方言 (Pennsylvania Dutch) でブラウフ (brauch)、標準ドイツ語ではブラウヘないしブラウヘライ (Brauche/Braucherei) という。<sup>(21)</sup>

## (四) 『メンノーフォーク』から

北米のメノナイトとアーミッシュを対象としたフォークロア研究者アーヴィン・ベックは二〇〇五年に『メンノーフォーク』と題する編著の第二巻を出版したが、そこにはインディアナ州エルクハート郡の看護師フィリス・ミラーが執筆した「アーミッシュのパウワウ話」と題する章が設けられている。ミラーによればパウワウには手かざし（手当て）、呪文、聖句の朗読、患者から別のモノへの病気の移転の魔術（感染魔術）などがあり、北米のドイツ系移民のなかでも際立って保守的なオールドオーダーアーミッシュは現在も病院の医師より同信の治療師を信頼している。それは一種の「代替医療」である。彼女はメノナイトだが、祖先はオールドオーダーアーミッシュであり、祖父母からしばしばパウワウ話を聞かされたという。そして一九七七年に六人の親族からパウワウに關する本格的な聞き取り調査を行い、具体的な治療方法の数々を知ることになった。フィリスの祖母バーバラ・ヨルダー（一八九七〜一九八五年）によれば、娘エマ（フィリスの母親）の左手には生まれつきあざがあったが、パウワウの心得のある従姉メアリ・クレメンスのもとに連れていくと、メアリはパウワウでそのあざをきれいにとってくれた。メアリが実施したのは「月のパウワウ」と呼ばれるもので、満月が近い日の夜にあざを唾で擦り、月を見あげ、「擦るものは減り、見るものは膨れる」(Vas da hiesht, nembt op, Vas da sansht, nembt tsoo) と唱える所作を三回繰り返すものであった。これは満月を前に引力を増す月にあざを移す移転の魔術である。一方、フィリスの父親ジョン・D・ミラーは、手の甲にいぼができたとき、彼の祖父に治してもらった。方法はタマネギでいぼを擦って雨樋の下に埋め、腐ったころにいぼは消えるというものであった。いぼは本当に消えたという。これも移転の魔術である。ただしタマネギの消失といぼの消失が同時に起きる点で共感魔術（類感魔術）でもある。ともあれジョンはパウワウの治療効果を心から信じており、甥っ子が鼻血を出していつこうに止まらなくなったときには、有能なパウワウ治療師ジェイク・ミラーのも

とに連れて行き、止血してもらった。ジェイクが聖書の言葉（エゼキエル書一六章六節）を読みあげると、鼻血はすぐに出なくなったという。その聖書の言葉はこうである。「わたしがお前の傍らを通って、お前が自分の血の中でもがいているのを見たとき、わたしは血まみれのお前に向かって『生きよ』と言った。血まみれのお前に向かって『生きよ』と言ったのだ」（新共同訳）。この聖句はペンシルヴァニアのドイツ系移民のあいだで広く止血のために使われてきたものである。<sup>(23)</sup> フィリス・ミラーは、パウワウの力は神に由来し、聖書の奇跡を再現するものだと論じている。そしてそれを信じる人にとっては代替医療になりうると述べている。この主張は彼女が勤務する病院での体験をもとにしており、レイキ (Reiki) のような別種のハンドヒーリングにも一定の治療効果があるという。<sup>(24)</sup> ともあれパウワウ治療師が読みあげる聖書の言葉が「呪文」として機能していることは明らかである。またパウワウには聖書とは無関係の魔術的要素も多分に含まれている。ペンシルヴァニアのドイツ系移民のパウワウを総合的に研究したパトリック・ドンモイヤーによれば、パウワウのさまざまな施術や呪文のルーツは口承だけでなく一八世紀からドイツで広く読まれていた『アルベルトゥス・マグヌスの秘法』(Albertus Magnus bewährte und approbierte sympathetische und natürliche Aegyptische Geheimnisse für Mensch und Vieh) や『ロマンヌの書』(Romanus-Büchlein)、『モーセ第六書・第七書』(Das sechste und siebente Buch Moses) などの魔術手引書であった。<sup>(25)</sup>

## 二、アーミッシュのロザンナ

現代アメリカのアーミッシュ家庭で広く読まれている書物に、メノナイトの学校教師ジョセフ・ウォーレン・ヨルダー（元オールドオーダーアーミッシュ）が一九四〇年に出版した母親の伝記『アーミッシュのロザンナ』がある。

ロザンナ（一八三八〜一八九五年）は赤ん坊のときに母を亡くし、父および兄弟姉妹とも生き別れたアイルランド移民（カトリック教徒）の孤児である。彼女はかつて一家に宿を提供してくれた優しいアーミッシュ女性に引きとられ、多感な少女時代を過ごし、アーミッシュ男性と結婚し、生涯アーミッシュの信仰を守った。彼女のおもな生活の場はペンシルヴァニア州ミフリン郡のビッグヴァレー（キシャコキラスヴァレー）である。ロザンナの物語はアーミッシュやメノナイトに対するアメリカ人の誤解を解く意図で書かれており、一九世紀のオールドオーダーアーミッシュの価値観と生活ぶりを克明に伝えている<sup>(26)</sup>。とりわけ家族総出で行う農作業、家畜の世話、森や草原での木の実・ベリー類の収穫や薬草摘み、滋味溢れる食事、キルト作りの楽しい集まり（*Hoie*）、宗派の違いを超えた隣人との助け合い、厳粛な礼拝・洗礼式・晩餐式・洗足式、教役者であるビショップ、ミニスター、デイーコンの三職の役割と選出方法（すなわち男女の信徒による推薦投票と聖書に従った「くじ引き」による最終決定）、罪の告白、破門（*excommunication*）と交際忌避（*shunning*）、赦しと再受容、若者の歌の会（*singing*）、デートの作法、数百人の親族が集う結婚式などである。ビッグヴァレーのアーミッシュの進歩派・中間派・保守派（すなわちレンノー派・バイラー派・ネブラスカ派）の分裂についても詳述しており、黒・黄・白のバギーが行き交うアーミッシュ社会の多様性を描きだしている<sup>(27)</sup>。しかしそれだけではない。この書物からはアーミッシュがヨーロッパの祖先たちから受け継いだ魔術的世界が垣間見えるのである。

ロザンナは成人後に兄弟姉妹との再会を果たすのだが、フィラデルフィアに住む兄ウィリアムズ（*W*）を訪ねて来たとき、ロザンナ（*R*）は質問されるまま、古い伝統のことを詳しく説明している。以下、一問一答を引用しておく。

- (W) 雑誌で読んだのだけどアーミツシユは魔女の呪いの術 (hexing) を信じているの？
- (R) ペンシルヴァニア・ジャーマンを話す人たちの一部にそういうことがあるとしても、わたしたちは興味ありません。魔女だと疑われたアーミツシユの老女もいたけれど、それは大昔の話。
- (W) 納屋に何かのサインやシンボルを描いて魔除けにするの？
- (R) いいえ、しません。わたしたちの教会はサインやシンボルを許していないから。シドニー郡やバークス郡では魔女の呪いを信じている人たちがいると聞くけれど、ここにはひとりもいません。
- (W) 適齢期の娘がいる家の農場のゲートは青いペンキで塗られているって本当？
- (R) いえ。そんなことしません。若い男女の結婚のことについてそんなふうに知らせるようなことはしません。
- (W) アーミツシユは痛みをとったり血を止めたりするパウワウを信じているの？
- (R) それは本当のこと。かなりの人が痛みの改善や止血だけでなく化膿性の炎症 (Hot Lute) や幼児の消耗症 (take-off)、丹毒 (wildfire)、結膜炎 (puscht Bloder) を治療できます。
- (W) どんなふうによ？
- (R) やり方はいろいろだけど、すべて聖書にもとづいています。すべて父の名において行われます。わたし自身もパウワウを習っているところで、止血や痛み止めの施術はもうできるわよ。<sup>28</sup>

ここにあげられている病気は、北米とくに中西部のドイツ系移民の世界で広くパウワウ治療の対象となっていたものであり、衛生面・栄養面で問題のある生活環境が背景にある。一九世紀の移民たちは開拓時代の習慣を保ち、近代的な病院の整備以前から活動していた民間治療師に病気を診てもらっていた。多くの治療師は人も家畜も治した。病

院が誕生してもそれは都市部にしかないため、田園に暮らす人たちは交通の便や金銭的な問題もあって前近代的な方法に頼りつづけていた。パウワウ治療は一般に農家の副業であり、代金をとらなかつた。それは聖書にもとづく信仰治療であり、癒しの力は神に由来するから、金銭を要求すると効き目がないと考えられていた。ただし患者が自発的に少額の謝礼（寄付）を置いていくことは可能であった。<sup>29)</sup>

ロザンナはやがて、医師が見放した幼児の消耗症の治療もできるようになる。結膜炎も丹毒も治せた。なおロザンナの一家は進歩的であり、町の開業医（ハドソン医師）の往診も受け入れていた。ハドソンは最初パウワウを疑ったが、現実には多くの人が癒されるのを目の当たりにし、やがて敬意を払うようになる。ハドソンはロザンナに向かってこう言った。「これは一種の信仰治療ないしメンタルヒーリングだろう。正直に言えばわたしはそれを理解できていない。しかし衰弱死しそうだったあなたのお子さんをマティー・ハルツラー「治療師」がパウワウで元気にしたので、わたしは賛同するよ。いつの日かわたしたちがパウワウをよりよく理解し、たくさんの丸薬や粉薬の代わりに用いることになるかもしれない」と。<sup>30)</sup> ハドソン医師は「代替医療」としてのパウワウの可能性を認めたのである。

ロザンナの物語（実話）は、前章で検討したレベッカ・ボントラーガー・グラバーの手記やフィリス・ミラーの調査報告と重ね合わせれば、きわめて示唆に富んでいる。アーミッシュは宗教と魔術の混じり合う世界で暮らしてきたのである。『アーミッシュのロザンナ』には心霊現象ないし怪奇現象への言及もある。ロザンナの姉マーガレットが訪ねてきたとき、親戚のエリ・ヨーダーが彼女に都会の話聞かせてもらう代わりにビッグヴァレーの亡霊伝説を次々に披露する場面がある。エリによれば、ロザンナの家から遠くないベルヴィルの村外れにクーチャーズホロウという窪地があり、そこには「首なし犬」がいて通行人の馬に飛び乗ってくる。セブンマウンテンズの山中には泥棒の亡霊がおり、夜な夜な現れて「盗んだ金をどこに置けばいいの」と何度も聞く。小麦の運搬業者が通りかかって「あ

んだ馬鹿だね。盗った場所に戻せばいいのさ」と告げた。そうすると亡霊は二度と現れなくなつたという。<sup>31)</sup> 著者ジョセフ・ヨーダーはエリの「空想」をからかつているが、ペンシルヴァニアのドイツ系移民のあいだに伝わる類話の数々を思えば、これはエリ個人の問題ではない。それはアーミッシュやメノナイトを含むドイツ系移民の文化に關わっている(ドイツ語圏スイスからの移民も、もちろんそのなかに含まれる)。

ペンシルヴァニア州レバノン郡には「首なし騎士」の伝説や夜中に徘徊する「フリルのキャップをつけた女」の亡霊譚がある。また、境界石を密かに動かして自分の土地を広げた悪人が死後に呪われ、重い石を担いだ亡霊となり、「どこに置けばいいの」とつぶやきながら歩き回るが、通りすがりの男に「あんた馬鹿だね。もとの場所に置けばいいのさ」と言われ、その通りにすると呪いが解けてもう現れなくなつたとの伝説もある。<sup>32)</sup> 「首なし騎士」は小説家ワシントン・アーヴィングのスリーピーホロウ伝説を思わせるが、これはドイツ各地に古くから伝わるものでもある。<sup>33)</sup> 境界石泥棒については西南ドイツに類似の伝説がある。<sup>34)</sup> 西南ドイツは北米移民の多い地域である。スイスのベルン州にも「勝手に境界石を動かす泥棒は死後に燃える人 (brennende Männer) になる」との言い伝えがある。「燃える人」とは亡霊のことである。<sup>35)</sup> ベルン州はスイス系再洗礼派が現代まで生き残つた場所であり、メノナイトやアーミッシュの北米移民の出発地でもあつた。なお泥棒の亡霊譚は「呪いの解除」を主眼とする場合もあるが、生前の罪の「償い」に力点があるケースもみられるため、中世カトリック時代の教訓的亡霊譚に由来する可能性もある。<sup>36)</sup>

なおランカスター郡の地方史家ユージン・ムーアは二〇一一年に『アーミッシュの民話』と題する書籍を刊行したが、そこにはレバノン郡に伝わる次のような物語が収録されている。働き者の鍛冶屋ジョンはある日、空腹の旅人に食事をふるまつたが、それはじつは使徒ペテロで、地上のようすを見守り、善人がいたら願いを叶えてあげる旅をしているのだという。ペテロはジョンの願いを聞こうとするが、ジョンは欲しいものは何もないと答える。しかし強い

ていえば、疲れて帰宅して自分のロッキングチェアに腰かけようとしたときにだれかがすわっているとくつろげないので、わたしのチェアにすわったらわたしが許すまで立ち上がれなくなってしまうようにし、だれもそこにすわりたがらないようにしていただきたいと希望する。ジョンのささやかな夢は叶うが、それは予想もしない効果を發揮する。ある日、見知らぬ男が来訪し、話があるというので、ジョンは室内のロッキングチェアに腰かけて待つていくと告げる。男はじつは悪魔の使いだったが、ペテロの奇跡でチェアから立ち上がれなくなり、悪事を働くことができなくなった。ジョンが「去れ」と命じると、男は一目散に逃げ去った<sup>37)</sup>。一見すると他愛もない笑話だが、その後には聖書の信仰と結びついた魔術的観念がある。ペテロの「天国の鍵」の権能（マタイ福音書一六章九節）を与えられた人には何かを（だれかを）繋いだり解いたりする力があるから、悪魔の使いであろうが盗賊であろうが、相手を動けなくしたり去らせたりできるのである。これは「泥棒退治の呪文」(Diebsagen) と呼ばれている魔術である。それはヨーロッパのドイツ語圏に広くみられ、ペンシルヴァニアのドイツ系移民もその継承者である。たとえば一九世紀アメリカの魔術書のベストセラー、ヨハン・ゲオルク・ホーマンの『失われた旧友』（一八二〇年）には次のような呪文が載っている。

おおペテロよ、ペテロ。神から権能を授かった方よ。わたしがキリストの教えによつて繋ぐものは繋がれるだろう。泥棒が男でも女でも、大きかろうと小さかろうと、若かろうと老いていようと、神によつて動けなくさせられ、わたしがこの目で見てこの舌で許可を与えるまで、先に進むことも後戻りすることもできなくなる<sup>38)</sup>。

アロイス・リユートルフが一九世紀後半に中央スイスの五州で行った伝説・習俗に関する調査の記録にも、聖母と

ペテロに祈れば泥棒は「ペテロの鍵の力と神ご自身の手で動けなくなる」という記事がある<sup>39</sup>。ここであらためて注意を向けたのは、前章で引用した『ホームズパン』に出てくる強盗の話である。この逸話はアーミッシュとメノナイトの文化的背景を顧慮すれば「泥棒退治の呪文」のヴァリアントとも解釈できる。父母の切なる祈りによって泥棒は悪事を働くことができず、おとなしく去っていったのである。無意識が生んだ古い「泥棒退治の呪文」との類似であるとしても、その類似は注目しに値する。ロザンナが生きた一九世紀と『ホームズパン』が編まれた二一世紀を同列に論じることとはできないが、少なくとも古い伝統を継承する保守派のアーミッシュやメノナイトにあつては、一〇〇年を超える歳月が過ぎても、同じ信仰理解やコスモロジーが受け継がれていると判断できよう。彼らにとつては、奇跡と神秘、魔術と信仰治療は過去の遺物ではないのである。

### 三、ヨーロッパの故郷——北米移民時代

(一) ヨーロッパからアメリカへ

メノナイトやアーミッシュの北米移民は一七世紀末以降に始まって一八世紀半ばにピークに達し、独立戦争のころに低調になる。最初のメノナイト移民（二三家族）を乗せた船、コンコード号がフィラデルフィアの港に着いたのは一六八三年、アーミッシュの集団（一一家



写真2 オハイオ州ホームズ郡の最古のファーム。19世紀初頭にペンシルヴァニアから移住したアーミッシュが最初に住んだ場所。筆者撮影（2017年）

族)の乗船したチャーミング・ナンシー号が同じ場所に入港したのは一七三七年である。メノナイトはペンシルヴァニアの首都フィラデルフィアの外れ、ジャーマンタウンに住み、その北部にも移り住んだ。アーミッシュも北上し、現在のパークス郡やレバノン郡、ランカスター郡などに入植する。アーミッシュの歴史家リロイ・ピーチャーによれば、一七二三年から一七七五年にかけて移民したおよそ三万人のドイツ人(二五歳以上)のうちメノナイトは約三〇〇〇人、アーミッシュは約五〇〇人であった。<sup>40)</sup>一九世紀前半以降は、ナポレオン時代の混乱とその後のヨーロッパ諸国の軍備増強・徴兵制の導入を背景として無抵抗主義(兵役忌避)の立場をとるアーミッシュの脱出がつづき、アメリカに三〇〇〇人以上が到来した。彼らはやがてペンシルヴァニア州だけでなくオハイオ州やインディアナ州、イリノイ州、アイオワ州、ニューヨーク州、そしてカナダにも住むようになる(写真2)。なおメノナイトの移民史について補足すれば、ロシア居留者たちが一八七〇年代以降、やはり徴兵を恐れて大挙してやってくる。その数は一万八〇〇〇人とされる。<sup>41)</sup>

メノナイトとアーミッシュは、彼らの信仰の源であるドイツ語聖書、一五六四年初版の讚美歌集『アウスブント』(Ausbund)、一七〇八年初版の祈りの書『キリスト信徒の務め』(Ernsthafte Christenpflicht)などを北米の地に持ち込み、一六六〇年初版の歴史書『殉教者の鏡』(Martyrenspiegel)のドイツ語版をアメリカの印刷所で出版させるなどしてドイツ語の活字文化の定着に努め、それとともに話し言葉としてのドイツ語方言(プファルツ地方の都市マーンハイム周辺のドイツ語に近いペンシルヴァニアダッチやスイスのベルンドイツ語)、装飾性の高い手書き文字(フラクトゥアと呼ばれるゴシック体)をもたらし、故国の農耕牧畜技術や農事暦(生活暦)、動植物の知識、食文化、服飾文化、建築文化、織物、工芸の伝統を新開拓地に根づかせ、口承の神話・伝説・格言、民間医療・呪文・護符として魔術を伝えた。<sup>42)</sup>

(二) アブラカダブラの呪文——モンベリアールの再洗礼派

アーミッシュのロザンナが生まれた時代、ヨーロッパの再洗礼派はどのような魔術を使っていたのであろう。ほとんど顧みられていない問題であるから本格的な研究はないが、断片的な史料は残っている。その手がかりは、たとえば一八九四年にブザンソンの司祭コンスタン・トゥルニエが書いた『モンベリアール地方のカトリシズムとプロテスタンティズム』に見つかる。現在のスイス国境に近いフランス東部のモンベリアールには、地方領主の経済的考慮による宗教的寛容政策ゆえに一八世紀前半以降スイス系の再洗礼派(メノナイトとアーミッシュ)が住みついていた。この地から旅立った北米移民も多い。彼らはスイスドイツ語の話者であるが、モンベリアールの地には彼らの言葉が通じる住民もいた。トゥルニエは軽蔑の念をこめて次のように記している。

今日もなおモンベリアールの再洗礼派は人間および家畜を治療するのにアブラカダブラの呪文 (*pratiques abracadabranes*) を用いる。八年前に彼らのひとり、足首を捻挫した人を治療したやり方はそうであった。一一時から真夜中のあいだに彼は患者のもとにやって来て魔術書 (*un grimoire*) を広げ、カバラ風の呪文 (*quelques formules cabalistiques*) を唱え、ときどき手をかざして患者の足に触れ、十字を切った。そして低い声で呪文を唱えた。炉端とベッドを行き来しておよそ半時間、治療を行った。二回にわたって同じことをしないと効かないのとこのだったが、料金は五〇フランになるといので、けっきょく彼は二度目の往診を頼まれなかった。<sup>(43)</sup>

トゥルニエの記述は荒唐無稽に思えるかもしれないが、北米のドイツ系移民の習俗を知る者にとっては真に迫る臨場感がある。たとえばホームマンの『失われた旧友』には、解熱の呪文としてアブラカダブラの変型である *Abaxa*

Catabaxが登場する(図1)。十字を切る所作も頻出する<sup>(44)</sup>。またカバラ風の呪文は『モーセ第六・第七書』を思わせる<sup>(45)</sup>。ただし十字やアラカダブラは前述の『アルベルトゥス・マグヌスの秘法』に出てくるから、モンペリアル<sup>(46)</sup>の再洗礼派治療師はこれを用いていた可能性もある。なおこの治療師が炉端とベッドを行き来したのは、患部から熱をとり去って火中に投じる魔術を実行していたからだと推測できる。ペンシルヴァニア州スクールキル郡の治療師ソフィア・バイラー(一八七〇〜一九五四年)は患者の熱や痛みを赤い毛糸に移し、これを台所で燃やして消失させる魔術を使っていた<sup>(47)</sup>。ところでモンペリアールの治療師は定額の「料金」をとろうとしたようだが、これが事実であれば北米の信仰治療とは異なっている。

ところでトゥルニエの報告書に最初に注目したのはフランスの宗教社会学者ジャン・セギである。それは一八世紀以降の再洗礼派の職業的成功(とりわけ酪農における模範的生産者としての名声)について明らかにする研究において医療分野に論及したさいのことである。セギによれば、こうした魔術的医療は地元の因習と同じであって再洗礼派の特性とはいえず、しかも一八五〇年以前にはそうした種類の魔術的行為の記録は見つからない。セギはこう論じたうえで、北米に渡らずにフランス東部の農村に定住したスイス系再洗礼派が一九世紀半ばになってから地元の魔術的慣習を採り入れたのではないかと推測している。ペンシルヴァニア州ミフリン郡ビッグヴァレーのオールドオーダーアー

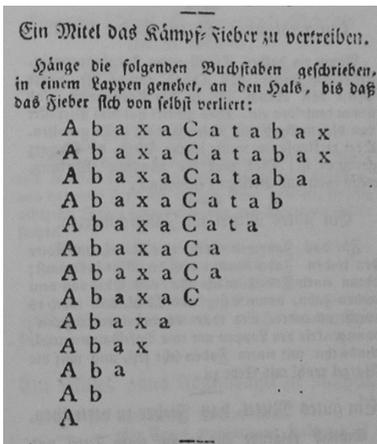


図1 ホーマン『失われた旧友』(1828年版)の解熱の呪文  
※出典については註(23)を見よ。

ミッシユの家庭に生まれ、のちにメノナイトに転じたアーミッシユ研究者ジョン・ホステットラーも、セギと同じ立場をとっている。<sup>48</sup> なおモンベリアールの民俗研究家シャルル・ロワは、一九世紀末に上梓した著作のなかで、再洗礼派については前世紀から魔術を使っていたとの噂があるが、「彼らが魔術的な医術やまじないの材料に関して何か新しいことを始めたとは思えない」と論じている。<sup>49</sup> 再洗礼派と魔術との「出会い」はいつごろだったのか、さらに時代を遡らなければ、詳しいことはわからない。

(二) クロプフェンシュタインの『再洗礼派農事暦』

モンベリアールの近く、ベルフォールのメノナイト農民ジャック・クロプフェンシュタインとその息子たちは『再洗礼派農事暦』と呼ばれる生活暦を作っていたが、一八一二年からは印刷物として刊行し、仲間たちに頒げた。そこにはカレンダー・星座・月齢・天文現象、農業上の助言のほか、医術・獣医術の記事も掲載されている。しかし魔術的な内容は含まれていない。一八三七年版にはヘルニア、腸チフス、動物の鼓脹症などの治療法が紹介されている。さらには歴史や時事的記事もあり、北米移民のこと、アメリカの宗教の多様性のことなどにも言及がある。それは農事暦（生活暦）であると同時に読者を啓蒙する教訓的な読本でもあった。<sup>50</sup> ここからは再洗礼派の——少なくともその一派の——「進歩的」な一面が垣間見える。ところでセギによれば、一八世紀末以降フランス東部に住むスイス系再洗礼派農民は地元の農民より三倍から四倍の農産物を収穫し、通常の二倍の小作料を支払うことができた。またアルザスのサント・マリー・オ・ミヌ（マルキルヒ）の再洗礼派は相当量の農産物を現地の市場で販売しており、マックス・ヴェーバーのいう「資本主義の精神」を体現するような人々であった。<sup>51</sup> なおサント・マリー・オ・ミヌはアーミッシユの初期の指導者ヤーコプ・アマンが一七世紀末に居を構え、スイス・アルザス・西南ドイツを旅してス

イス系再洗礼派の道徳的な引き締めを試みた根拠地である。すでに述べたようにアマンは道徳面で妥協を許さない人物であり、厳しい「破門」の実施を特徴とするオランダ・メノナイトの『ドルトレヒト信仰告白』（一六三二年）の精神を重視する厳格主義者であった。<sup>(32)</sup>

一八一三年、プロテスタント神学者シャルル・フェルディナン・モレルが書いたジュラ地方（バーゼル司教領）の歴史書には同地に住む再洗礼派についての記述があり、そこには再洗礼派の治療師のことも出てくる。「ムティエ・グランヴァルには再洗礼派の治療師がおり、行列ができるほど患者がやって来る。患者の尿をみて（à l'inspection des urines）病名を診断するという驚くべき秘密もさることながら、この地域で採れる薬草を使って安上がりには治療を行うから好まれているのだ」と。モレルは再洗礼派の治療師の誠実な態度を評価している。魔術的医療を非難する言葉はみえない。尿の色や臭いの検査には魔術性はなかったと考えられる。<sup>(33)</sup> 一九世紀前半までは、セギヤホステットラーが推測するように、再洗礼派は魔術とは無縁だったのであるうか。われわれは一八世紀以前に遡って事実を確かめねばならない。

ところで、再洗礼派の農事暦（生活暦）の伝統はアメリカに移った人たちのあいだでも受け継がれ、現在に至っている。オハイオ州バルティックのオールドオーダーアーミッシュのレーバー書店が一九三〇年から発行している生活暦は、カレンダー・星座・月齢・天文現象、聖書の教え、教訓的逸話、アメリカとカナダのアーミッシュ教役者の一覽などを掲載しているが、興味深いことに裏表紙の内側には一二星座と人間の身体の部位の関係図、瀉血と吸玉治療（Aderlassen und Schröple）の要領、血液の色による健康診断の手引きが載っており、きれいな赤色なら健康、黒みがかっていれば便秘、黄色味を帯びていれば肝臓病、緑がかっていれば心臓病といった解説がみえる。さらには木材を伐採する時期としては欠け行く月が牡羊座か乙女座か山羊座に位置する時間帯が最適であるといった助言も記され



なってルター派の聖職者が編集しなおしたと考えられている。ただしその内容は宗派色が薄く、再洗礼派の信仰にも合致すると考えられたため、メノナイトやアーミッシュの愛読書のひとつになって現在もアメリカで印刷されつづけている。<sup>(56)</sup>

本書は信仰生活上の助言なども含んでいるから建徳書の性格をもっているが、大部分が祈りから成っている。朝夕の祈り、食前食後の祈り、時節や状況に応じた祈りの模範例の数々が収録されているのである。そのなかでも注目されるのは、たとえば雷、雹、火事、疫病、飢饉、戦災などを免れるための祈りや旅（外出）を前にした祈り、安全に帰還できたときの感謝の祈り、病床にあるときや死を間近にしたときの祈りなどである。最後のものは自分のための祈りと他者（病人）のための祈りに分けられる。外出前の祈りはこうである。

主イエスよ。肉体をとって地上に来られ、わたしたちのために数多くの困難な旅をなさった方よ。今わたしも旅立とうとしており、前途にどのような危険が待ちかまえているかを知りません。ですからわたしはあなたに切に祈ります。あなたの力と慰めに満ちた臨在によってわたしの旅の同行者（Reisegährte）になってください。そして天使たち（die heiligen Engel）を遣わし、わたしが安全に旅をつづけ、すべきことを首尾よく達成し（das Meine fruchtbar verrichte）、そしてわが家に元気に戻って家族に再会できますように。<sup>(57)</sup>

この祈りの目的は現世的利益であり、祈る人の意識次第で宗教と魔術あるいはヴェーバーのいう「神礼拝」と「神強制」の境界をまたぐ可能性をはらんでいる。それは神の同行、天使の守りを求める呪文の機能をもちうるのである。ところでペンシルヴァニアのドイツ系移民には前述のフラクトゥアで記した「家の祝福」（Hausseggen/house

Blessing) を壁に貼る習慣があった。旅の安全と残された家族の無事を願ったことである。たとえばインディアナ州エルクハート郡のメノナイトの印刷所で一八九〇年に製作されたものには次のように記されている。

イエスよ。わが家を離れずつねに住みたまえ／恵みをもつて住みたまえ／わたしはこれから家を空けます／あ  
あ、大いなる祝福の主よ／祝福をもつてわが家に来てくださり／喜びと平和と幸福と健康 (Freud, Friede, Glück  
und Heil) をわが家にもたらしてください／ヨブやアブラハムがあなたの祝福を受けたように／わたしも守ってく  
ださい／あなたの祝福をもつて。<sup>(58)</sup>

これは「家長」が旅に出るときに家族の無事と自分自身の旅の安全を祈る定型的な表現であり、ドイツ系移民たちはこれを一種の護符として壁に貼るか聖書や宗教書に挟んだ。ここに魔術的要素があることは明らかである。いっそう魔術的な別の定型句を用いた「家の祝福」もある。以下は一八〇〇年ごろペンシルヴァニア州ランカスター郡の有者不明の『殉教者の鏡』（メノナイトやアーミッシュが重要視する前述の歴史書）に挟まれていたものの一節である。その始まりの文言は次のとおりである。

神の御名によってわたしは外出します／ああ神よ、この家全体を統べたまえ／その主婦 (Hausfrau) とわたしの子どもたちをあなたに託します／わたしの心と口と手を悪徳と恥辱から守りたまえ／わたしがすべきことを首尾よく達成し (mein Sach wohl richte aus)、そして喜んで帰宅することが出来ますように。<sup>(59)</sup>

前述の『魂の小さい庭』の祈りととの類似性は明らかであろう。なお「家の祝福」には文字だけのものもあるが、一對の天使（旅人とその家族の守護者）、ゴシキヒワ（幸運のシンボル）、チューリップ（貞操・希望・信仰の象徴）などをあしらった色彩豊かなものもある。<sup>(6)</sup>しかし「家の祝福」は美しいだけではない。上にあげたものには次のような恐ろしい言葉がつづくのである。

わたしの家で呪い (Fuch) をかけるな／すぐにドアから外に出ていけ／さもないと天の神がわたしもおまえも同時に罰するであろう。<sup>(6)</sup>

これは邪悪な魔術師や魔女が家長の不在時に家に来て家族に危害を加えないようにする予防的魔術の一種である。「家の祝福」は「魔除け」なのである。魔術的内容を含んだ印刷物や手書きの紙片には、「家の祝福」以外に「天国からの手紙」(Himmelsbrief) や「新年の祈り」(Neu-Jahr Wunsch) や「火事除け」(Feuer-Segen) などがある。<sup>(6)</sup>なお「わたしもおまえも同時に罰する」(straffen mich und dich zugleich) の意味はわかりにくいだが、悪人（邪悪な存在）を招き入れた家とその家族（ないし共同体）はその悪人もろとも罰せられるという神罰思想の表れであろうか。罪と神罰については後述するので、別の事例の分析に移ろう。前述の『魂の小さい庭』には、健康の増進と体力の回復のための湯治ないし水治療に関する次のような興味深い祈りが収録されている。

全能の主よ。あなたは山や谷に人間に益をもたらすあらゆる種類の草や根や樹液を生じさせ、大地や石や岩から冷たい水、温かい水、酸い水、甘い水を湧きださせ、弱くなって衰えた体力の回復やかけがえのない健康の維持に

役だつようにしてください。ですからわたしたちはあなたを讃えて感謝を捧げます。これからわたしは水治療 (Wasserkur) によつて健康の維持と回復を試みます。しかしわたしは、その水も含めてあらゆるものがあなたの祝福なしには役にたたないことを知っています。ですからわたしはあなたに祈ります。あなたは苦い水を甘くして無数の人間や家畜の渴きを癒す方です。<sup>(63)</sup>

この祈りからは、薬効のある草木や湧き水や鉱泉は神の賜物であり医療は神の力の発現であるという確信が読みとれる。この信念は前近代のキリスト教世界において広く共有されていた。宗教改革者ルターも同じであり、彼は医術を「神により啓示されたもの」と呼んでいる。<sup>(64)</sup>次に病氣と「罪」の関係に触れた祈りを検討しよう。

神はわたしたちを苦しめて虚栄を棄てさせ、改心を促す手段としてわたしたちに病をもたらず。病氣になつたらすぐにこう言うのだ。わたしは自分の罪責ゆえに罰せられているのだと。わたしは主に対して罪を犯したから主の怒りを受けているのだと。主よ、あなたに対して罪を犯したわたしの魂を恵みによつて清めたまへと。どのような罪を犯したからどのような病に陥つたか、あなたはよく考えねばならない。主なる神に対し、悔い改めの心をもつてあなたの罪を告白し、イエス・キリストの御名によつて赦しを求めなさい。そして良い薬 (Arzneymittel) を用い、それがあなたの健康に役だつよう、祝福を与えてくださるよう神に願いなさい。<sup>(65)</sup>

この祈りからは、病とは人間の具体的な罪に対する神罰であるという観念が読みとれる。さらにそこには、罪の告白と悔い改めが治療の前提であつて薬が効くには神の祝福が必要であるとの確信も示されている。自然界のどのよう

な物質を薬として用いようと、病気の治療は神癒ないし信仰医療なのである。これは前近代のキリスト教世界に特徴的な疾病観であり、医療観である。施術の前に治療師と患者が祈りを捧げる場面は日常の風景に属した。なお病氣と罪を結びつける思想は、罪につけ入る悪魔が人を病気にさせるといふ考えと結びつくこともあった。<sup>66</sup>『魂の小さい庭』には、重病を患う人の友は次のように祈るべきであると記されている。「彼が病の原因である罪と悪行 (Sünden und Missetaten) を心から悔いるように導いてください。『・・・』彼をむさぼり食らおうとして唸り声をあげながらうろついている獅子のようなサタンの試みに対して彼を強くしてください」と。<sup>67</sup>

(五) 魔術のアトランティックヒストリー——スイスとアメリカ

上述のようなさまざまな病氣平癒の祈りは、『魂の小さい庭』の精神のとおりに行えば宗教ないし礼拝の実践と位置づけられるであろう。しかし、もし特定の言葉や仕草や祝福(聖別)された薬物の機械的な組み合わせが治療を成功させると考える人がいるとすれば、その人は魔術の領域に足を踏み入れている可能性がある。祈りは呪文となり「神礼拝」は「神強制」の性格をもつことになる。中世カトリック世界においては、たとえば司祭が祝福した聖水や聖遺物に病気の治療や魔除けや収穫の促進の効果があると信じる人たちがおり、司祭たちもそれを理解したうえでそれら(の一部)を信徒たちに配っていた。教会の秘跡は民衆世界の準秘跡と結びついており、一般信徒が家や納屋や畑でその執行者になることができた。なお準秘跡については、いわゆる「事効論」に従い、一定の形式(祈りの言葉や所作)を満たせば必ず効くと考える人たちもいれば、「人効論」に従い、執行者の信仰の深さや道徳的水準に左右されると考える人たちもいた。<sup>68</sup> 宗教改革後、プロテスタントたちは秘跡および準秘跡を厳しく再吟味し、その魔術的効力を否定したとされる。すでに述べたように、ヴェーバーの合理化論・近代化論はそうした認識にもとづいて構成

されている。しかしながら多くの場合、現実とは異なっていた。ときとしてプロテスタントたちも準秘跡を求め、信仰医療を行い、魔術を実践していたのである<sup>(69)</sup>。もちろん再洗礼派も同じである。

前近代のヨーロッパ人にとって、人間の身体と自然世界（宇宙）は神の創造の秩序のもとで共感（交感）の関係にあり、星辰が地上の人間や動植物に影響を与えたり、人と人、人とモノ、人と動物が超自然的な交信を行ったりするのは当然のことであった。一般信徒の多くは、カトリックであろうとプロテスタントであろうと、何らかの前兆によって未来を予見したり、祈りや呪文で超自然的な存在を呼びだしたり、それによって人や家畜を守ったり、遺失物を発見したり、犯罪者を懲らしめたり、悪魔や亡霊、魔女の企みを阻止したりすることができると信じていた。そして信徒が執り行う準秘跡を肯定する聖職者たちは、意識していようといまいと、民衆世界の魔術を温存する役割を果たしていた<sup>(70)</sup>。

スイスのベルン州の農村部エメンタールには、一六世紀から現代までつづくベルン農村部最古の再洗礼派教会が存在している（写真3）。彼らの正式名称はメノナイトだが、古再洗礼派（Altkircher）とも称している。この地の民俗調査を行い、一九一一年にその成果を発表したハンス・ツァーラーは、住民たちの内面世界がよくわかる様々な慣習や説話を記録している。たとえば、クリスマスの夜に農夫が納屋に入ると家畜



写真3 ベルン州エメンタール地方ラングナウの再洗礼派教会。16世紀から現在まで存続。写真の建物は19世紀のもの。筆者撮影（2012年）

がしゃべる声を聞くことができるか、少女が七つの井戸を巡って水を飲めば七つ目の井戸に未来の夫が腰かけているといった言い伝えである。またツァーラーは、ある村には家畜が魔女の妖術（ウィッチクラフト）の被害を受けないように漏斗を拡声器のように使って大声で祝福（Segen）の祈禱を行う牧童がいるとか、祝福（聖別）された品物（gesegnete Sachen）を納屋に置くと魔女は入れないといった魔女撃退法も数多く報告している。さらには「首なし猫」がいる場所があるとか、昔の服を着た女性の亡霊が出る森があるといった怪異譚も記録している。最後のものは前述のベルン農村部最古の再洗礼派共同体のあるエメンタールのラングナウの伝説である。さらにまた、いぼを治したければ教会で礼拝中におしゃべりする二人組をみつけ、自分のいぼをいじりながらその二人に向かって「わたしが見ているのは罪深い行い／わたしがいじっているものは消える」と唱えるべしといった呪文の記録もある。<sup>17)</sup>これは月を見あげて「擦るものは減り、見るものは膨れる」と唱える前述の現代アーミッシュの呪文の通じる移転の魔術である。悪いもの（いぼ）が悪いもの（おしゃべりする人）に移るという点では共感魔術でもある。月を見あげていぼをとるパウワウは、エドウィン・ミラー・フォーゲルが二〇世紀初頭に収集したペンシルヴァニアダッチのフォークロア集にも出てくるから、アーミッシュに限らない。ミラーが伝えているのは新月の夜に窓を開け、いぼを人差し指でいじりながら「わたしが見ているものは膨れ、わたしがいじっているものは減る」と唱える呪文である。<sup>18)</sup>なおリユートルフによれば、手のこぶを治すにはそれを親指で擦りながら無駄話をする女性三人（か二人）を見やり、「わたしのこぶを持っていけ」と唱える術がスイス各地に伝わっている。<sup>19)</sup>これも典型的な移転の魔術である。ともあれ、スイスのいぼとり（こぶとり）は人に被害を与えるものであるから「害悪魔術」にも分類できる。ところで筆者はベルン州の公文書館で古い民俗資料の調査を行ったが、たとえばアールガウ地方に伝わる一八世紀末の魔術書（手書き）には、泥棒に盗品を返させるために聖金曜日（キリストの受難日）に二本の釘（drei Rosnägel）をつくって行う呪い

の術が記載されていた。これは前述のホーマンの著作に出てくる魔術に近い内容である。なお三という数字は三位一体ないし三本の十字架を暗示しており、それは悪人が罪の呵責に耐えかねて盗品を返さざるをえなくなる力をもつとされる。<sup>(74)</sup> ベルン農村部においては、当然のことながら、彩色された手書き（フラクトゥア）の護符も用いられていた（図4）。北米のドイツ系移民の場合と同じである。いずれにしても、神と人間、自然と人間、人間と人間の共感あるいは交感による魔術は、大西洋をまたいで行われつづけていたのである。それは魔術のアトランティックヒストリーにほかならない。

#### 四、宗教改革と宗派化の時代

本章では宗教改革と宗派化の時代、すなわち数多くの宗派主義的国家教会とセクトが分立した一六、一七世紀のヨーロッパに目を向ける。とくに注目するのは再洗礼派運動が活発であったスイスである。この地では彼らと統治権力・国家教会・信徒層との対立と融和、弾圧と黙認の諸相が数多くの一次史料によって確認でき、そこから魔術や医学、奇跡的現象に関する情報もある程度は得ることができるからである。<sup>(75)</sup>



図4 ベルン農村部で1733年に製作された「新年の祈り」(StABE N Rubi 58)。この種の護符については註(62)も参照

## (一) 再洗礼派の奇跡の泉——バーゼルのブーベンドルフ

一七世紀、つまりヨーロッパの再洗礼派がアメリカを意識するはるか以前、彼らと魔術および魔術的医療にどのような関わりがあったかを示す刊行物はほとんどない。しかし、一九世紀末にスイスで出版された書物のひとつに重要な手がかりがみつかる。その書物とは、バーゼルのジャーナリスト、フランツ・シュトゥッカーが編集した地方史『ジュラからシュヴァルツヴァルトまで——歴史と伝説、土地と住民』（一八八四年）である。本書には一七世紀前半に注目を集めたブーベンドルフ温泉の成立史に関する記事があり、そこに再洗礼派が登場するのである。シュトゥッカーがバーゼラント州の公文書館で発見した史料によると、ブーベンドルフ村を管轄する代官がバーゼル市当局に一六四一年に書簡を送り、以下のことを報告している。すなわち当地では「奇跡が起きて健康がもたらされている」こと (so da miracul würcchet und gesund machet)、この温泉には多くの人が群がっていること、数日間の飲用や入浴によって身体の麻痺が治ったり視力や聴力が回復したりする実例が数多くあること、村役人も眼病の治療の恩恵にあずかっていること、代官自身の調査でもその温泉水は黄色味を帯びていてぬめりがあり、薬効があると感じられること、そしてベルン領レンツブルク出身のある再洗礼派がこの温泉にはベルン領で前年に発見されたゴンテンシュヴィールの温泉（現アールガウ州）をしのぐ効き目があると述べていること、その再洗礼派は獄中で拷問されたときにできたいくつもの古傷がブーベンドルフで癒されたことと証言していることなどである。<sup>76)</sup>

鉱泉の治療効果は当時のヨーロッパにおいて広く知られており、とくにスイスには温泉地が随所にあつた。現代との違いは、当時の多くの病者たちが「奇跡」を求めて新発見の泉に群がり、その水を飲み、身体（患部）を浸したことである。上述の史料に出てくる再洗礼派もそうした人々のひとりであつたと考えられる。なおバーゼル市当局はブーベンドルフ温泉の効能についてバーゼル大学医学部に問い合わせたが、その水は普通の水であつて「くだんの

再洗礼派やその種の狂人たち」(der widerträuffer und dergleichen Wansinnigen Leuthen) の主張は信用すべきでないといった回答が送られてきた。<sup>77</sup> それでもブーベンドルフ温泉には訪問者が絶えなかった。宿泊施設ができたのは、それからおよそ百年後の一七四〇年である。経営者はヤーコプ・ルーディンという理髪師であった。理髪師は外科医を兼ねることが多く、吸玉治療や皮膚腫瘍の切開などを行った。再洗礼派の奇跡の泉は、その後も長く維持されることになる(現在はホテルだけが建っている)。その歴史についてはバーゼルの再洗礼派研究者ハンスペーター・イエックがシュトゥツカールの記述をもとに詳しく調べなおしている。<sup>78</sup>

(二) 治療者としての再洗礼派——チューリヒとベルン

ブーベンドルフの再洗礼派は自分の体の傷を癒すためにベルン領からやってきたが、それは拷問と釈放が繰り返される過酷な日々を送っていた再洗礼派が仲間内でどのようにして怪我の治療を行っていたのか、調査を行う意義と必要性を感じさせる事例である。以下はこの分野について先駆的な業績のあるイエツカールの助言を受けながら筆者がイスで現地調査・史料調査を行った結果である。

一六三四年一二月、チューリヒ支配下のキープルク伯領を治める地方代官ゲロルト・グレーベルはヴァルテンシュタイン出身の再洗礼派ヤーコプ・ツェーレンダーの取調べを行い、その医療活動についてチューリヒ市長に次のように報告している。

彼は医療の実施のさいに聖三位一体の名をみだりに唱えたので (da er in der arzneymeyen gebrauch die Heilige göttliche dryfaltigkeit mißbrucht) 、その軽率ゆえに、またその他の禁じられた行為ゆえに処罰すべきです。しか

し彼は、その他の医薬の扱いの面では適切かつ誠実、有能であり、何の違反もありません (daß er in anderen syden medicinalischen stuken ufrichtig, getrew, und glückhaftig auch unvertrossen gegen mannighlichen ist)。<sup>76</sup> このことに鑑み、「・・・」罰金の支払いを命じるところとどめるべきです。

ツエーレンダーはしばしば悪事を働いたとされていますが、普通の自然的な医療手段しか用いておらず、患者たちにつねに愛する神に熱心に祈りを捧げて回復を願うように勧め、彼らがもとの健康をとり戻すべく医療を提供しており、施術の前には、神の祝福なしに外的手段 (one Gottes segen die usserliche Mittel) を用いるだけでは無駄だと説明しています。本官の部下が搜索を行い、印刷本や写本、葉草や植物の根や油 (Krüter, wurtzen, Öl etc) を大量に発見しましたが、呪文、十字架、魔術の記号その他の迷信的なもの (weder sägen, Crucifix, Caracters noch anderen derglychen aberglöubigen sachen) はありませんでした。彼はそうした呪文や魔術が神の言葉「聖書」において禁じられていることをつねに肝に銘じています。しかし現実には彼は、つねに父なる神と子と聖霊の名において医療を行ってごます (er habe zwaren imm bruch, das er alle syne artzneyen im namen Gottes des Vatters, Sohns, und heiligen Geistes zebuchen gebe)。これによつて彼は過ちを犯し、瀆神 (abgötterey) に及んでいます。ただしそれは意図せざる罪 (unwüssende sind) です。というのも彼は、その言葉の力に (den Worten Kraft) 頼るのではなく、すべてを愛する神の働きに帰しているからです。今後は市長殿がその支配地において、またザンクトガレンやネーデルラント等において新たな調査をなさることをお勧めいたします。というのも、彼は遠方からの問い合わせに応じて自己負担で医薬を送っているからです。そのさいに彼が禁じられた魔術 (verbotenen Künsten) を行っていないか、どうぞお調べください。<sup>77</sup>

この史料に出てくる再洗礼派の治療師ツェンダーは、医療の成功は神の力と助けにかかっていると確信している。その点で彼の考えは正統派と変わらない。ルターやツヴィンゲリも癒しは神の業であると信じていた。治療の前の祈りも当然であった(図5)。近世の医療は例外なく信仰医療である。薬草を用いる民間療法も、魔術とは直結しない。

それではチューリヒ市当局はいったいなぜツェンダーが「三位一体」の名を唱えることを「瀆神」として責めているのであろう。それは彼が、たとえば「主の祈り」の一部(最後)として「三位一体」を唱えるのではなく、あたかも呪文のように「独立的」に用いていたからである。彼自身は聖書

に照らしてこの行為を魔術的とはみなしていなかったようだが、司直の側には別の観点があつた。「三位一体」(の発語)は中世カトリックの長い伝統のなかで魔術の一部として用いられており、それはプロテスタントの為政者にとつては処罰すべき行為なのである。たとえば近世ドイツ最大級のカトリック巡礼都市ケルンには民間医療のさいに唱えられる幾多の呪文の記録が残っているが、ヘルニアの治療の場合は次のような魔術と呪文が用いられていた。「カエルの卵を用意し、まず脱腸を手でなで、次の呪文を唱え、その卵を軒下に埋めるべし。「・・・」すなわち、父と子と聖霊の御名において、この卵がもとに戻るように脱腸が治りますようにと」。こうした魔術的行為は特定の言葉と特定の所作によって特定の現実的效果を引きだす「神強制」(ヴェーバー)の特徴を備えている。<sup>(80)</sup>



図5 カスパル・シュトロマイア『さまざまな医術』(1559年)の挿絵。手術前に祈る患者と治療家と助手たち。シュトロマイアはリンダウの開業医(ルター派)。ヘルニア治療で名をなした。Caspar Stromayr, *Practica Copiosa*, Lindau 1559.

次に検討したいのは、ベルン領アールガウの村ムーレン出身のルドルフ・キュンツリに対する市当局の尋問記録（一六四五年）である。ベルン市当局は再洗礼派取締局（当初は委員会）という行政機関を設けて調査や審問を行い、ときには捕吏を使って一斉摘発を実施していた。これはその組織の公式記録である。

尋問に対して彼は以下のように答えた。生業は織布工であったが、妻が病気を患ったときにその治療をおこなったことがある（verartzet hatte）。それをきっかけに医術（artzney）を始め、神の助けをもって数多くの治療を行い、瘰癧やフランス病「梅毒」、切り傷や骨折などを報酬なしで首尾よく治療した（ohne zal glücklich curiret）。再洗礼派に加わっておよそ二〇年になるが「・・・」のすぐれた医術ゆえに（sneß glücklichen artzes willen）当局の要請を受け、領内にとどまることを許されている。<sup>81</sup>

これは民間医療に携わる再洗礼派が逮捕や尋問を受けながらも医療の質の高さゆえに当局によって見逃されていた注目すべき事例である。なおキュンツリは再洗礼派以外の住民にも医療を提供していた。治療内容は外科を中心としており、それらは自己流ではなしえないから、何らかの縁で医術を習得していた可能性がある。あるいは一族が無許可で医業を営んでいたのかもしれない。生業を別にもちながら「報酬なし」で医療活動に携わるのはアメリカのドイッ系移民のパウワウ治療師と同じである。キュンツリは北米に渡って民間医療に従事したメノナイトやアーミッシュの先達だといえるであろう。

ところでキュンツリは前述のチューリヒ領のツェンダーのように魔術の疑いをかけられていない。ただし彼が信仰治療を実践者であったことは容易に推測できる。むしろそれ以外は考えにくい。それでも弾圧を免れた背景は当時

のベルン領の農村社会における有能かつ誠実な治療師の不足であろう。キュンツリは非再洗礼派の患者も迎えており、そのことが当局に評価されたのである。再洗礼派のいわゆる「分離主義」の内実は再検討する必要がある。そもそも「現世」からのトータルな分離はありえない。為政者や非再洗礼派の隣人との接触は不可避であり、場合によっては妥協や協力関係も成立しえたと考えねばならない。キュンツリの事例がその証左である。ハンスペーター・イエッカーは、聖書主義者であった再洗礼派はエレミヤ書二九章七節に従って迫害者たちとも一定の協力関係を築いたと推測している。エレミヤ書の当該箇所には、神はユダヤ人たちに捕囚の加害者であるバビロンの町の平安のために祈るように命じたと記されている。それはバビロンの町の平安はそこに住むユダヤ人の平安にもつながるからである。<sup>(83)</sup>

ところで『アーミッシュのロザンナ』には他派の隣人たちと交流するペンシルヴァニア州ミフリン郡のアーミッシュの開放的な姿勢が描かれている。パウワウの力を使った治療はアーミッシュ仲間を超えていた。さらに重大な案件に関する連帯もみられた。たとえば、南北戦争のときアーミッシュは非暴力主義を貫き、徴兵に応じるかわりの高額の免除金を教会の基金を使って支払ったのだが、ルター派や長老派やメソジストの非暴力主義者のためにも資金援助を行っていた。<sup>(84)</sup> 再洗礼派はしばしば「現世逃避的セクト」とみなされるが、彼らはけっして単なる隠遁者ではなく、現世の価値観に抵抗しつつ現世の内側に生きていたといえる。すでに述べたようにヴェーバーは再洗礼派の「現世的禁欲」への志向性を指摘したが、その見通しは間違っていないと考えられる。この志向性はベルン農村のキュンツリの時代にすでに確認できる。なお一九世紀のアーミッシュのロザンナが嫁いだヨーダー家の遠い祖先は、ベルン農村部に住んでいた。

## (三) 奇跡か魔術か——『アウスブント』および『殉教者の鏡』から

ヨーロッパの再洗礼派は一九世紀になってから周辺の影響されて魔術を行うようになったとセギヤホステットラーが推測していることはすでに述べた。しかし一八世紀にも一七世紀にも彼らのあいだに魔術的傾向があったことは明らかである。それでは一六世紀はどうであろうか。再洗礼派はルターやツヴィンゲリと同じように中世カトリックの七つの秘跡を悪魔的儀式と批判し、そのうちの二つだけ（すなわち洗礼と聖餐）、秘跡性を剥奪したうえで残した。洗礼の水自体には罪人の「新生」や悪魔の力からの防衛の効果はないし、聖餐のパンとぶどう酒はキリストの体と血に実体的に変化することはない。そう信じた再洗礼派は、「高度な宗教」を奉じて「脱魔術化」を推進していたようにみえる。<sup>(85)</sup>しかし教会の儀礼だけが宗教と魔術のせめぎ合いの最前線であったわけではない。いわゆる「奇跡」は教会の儀礼に閉じ込められていたわけではないからである。

アメリカのアーミッシュが大切にしている讚美歌集『アウスブント』に「ハスリバッハーの歌」という三二連の長いバラッドが載っている（一四〇番）。『アウスブント』の初版は一五六四年に出版されたが、もともなったのは一五三〇年代に南ドイツのパスサウの牢獄にいたスイス系の再洗礼派が歌った一連の讚美歌だとされている。現代のアーミッシュが使っているのはアメリカでの改訂版であり、そこには当然「ハスリバッハーの歌」も含まれているが、当初スイスやドイツでは『アウスブント』とは別の六ページの小冊子として出まわっていた。この長い讚美歌に名を残すハンス・ハスリバッハーは、ベルン領エメンタールの農村ズミスヴァルト出身の再洗礼派説教師であった。彼はたびたび逮捕されて拷問を受けたが、棄教を拒み、ついに一五七一年、ベルンで斬首される。そのさい処刑場に居合わせた人々は次のような三つの「しるし」を目撃したという。すなわち、第一にハスリバッハーの刎ねられた首が彼の帽子のなかに転がり込んで笑い、第二に太陽が真っ赤に染まり、第三に井戸水が血に変わるといふ不思議な現象である。

彼の首は刎ねられた

そして帽子に転がり込んだ

別のしるしも現れた

太陽は血の色に

井戸の水も血に染まったのだ

ハスリバツハーの刎ねられた首が本人のかぶっていた帽子に転がり込んだのは、彼は生きるべき人であったこと、迫害者はその代価を払わねばならないことを神が奇跡によって伝えようとしたから、と当時の人々は受けとめたであろう。そして赤い血の色は神の怒りと理解されたであろう。ともあれ、これは讚美歌とは思えない奇怪な内容である。そしてさらに次のような歌詞がつづく。

死刑執行人は後悔して言った

無実の人の血を流したと

そしてある老人が言った

帽子のなかの首が笑ったことは

神の罰 (Gottes Straff und Ruth) を意味する<sup>(86)</sup>

迫害者は神罰を受けねばならない。これはそういう内容の歌詞である。そしてこの老人——おそらく神の使い——は死刑執行人たちに向かって「もし君らがこの再洗礼派を生かしてあげていたら／君たちは永遠に助かっていたろうに」(Hätt ihr den Täufer leben lahn, / Es würd euch ewig wohl ergahn)とも語っている<sup>(87)</sup>。神罰は魂の救いの喪失であり、永遠の呪いである。この讚美歌は事実上、迫害者への呪いなのである。ハスリバッターの歌は、メノナイトとアーミッシュが読みついできた『殉教者の鏡——流血の劇場』(オランダ語の初版一六六〇年、増補版一六八五年)にも部分的に収録された。それはアメリカで出たドイツ語版(初版一七三八年、第二版一八一四年)にも受け継がれている<sup>(88)</sup>。歌の全体が収録されたのは英語版(一八八六年)からである<sup>(89)</sup>。それはこのスイスの殉教者とその奇跡物語への関心の高さを示しているであろう。そしてこのことは、日常生活における超自然的現象への関心とも連動していたと考えられる。

一八六〇年にヴォージュ山中の再洗礼派の集落を訪ねたフランスの歴史家アルフレッド・ミシエルは、エルダー(牧師)であり治療者でもあったニコラス・アウクスブルガーと親しくなり、そこでハスリバッターの歌を知った。アウクスブルガーはこの歌を丸ごと暗唱できたという。この殉教者の信仰の証言と奇跡は一九世紀になってスويس系再洗礼派の内面に深く刻まれて



写真4 ハスリバッターを収監したエメンタールのトラクセルヴァルト城。筆者撮影(2012年)

いたのである。<sup>90</sup> ハスリバツハーの歌によれば、処刑の日の奇跡は神の計らいによって起きたものであり、じつは獄中のハスリバツハーに事前に告げられていた(写真4・5)。

ハスリバツハーは斬首される日の夢をみた  
明るい日の光のなか

目の前に一冊の小型本 (Büchlein) が現れた

神の御使い (Ein Engel Gottes) が彼に言った

そこに書いてあることを読みなさいと

彼がそれを読んでみると

このようなことが書いてあった

彼の首が刎ねられるとき

神は三つのしるし (Zeichen) をもって

彼に対して不正 (unrecht) がなされたことをお示しになる。<sup>91</sup>

再洗礼派が信じていたのはこうした奇跡であり、天使の助けであった。なおセギの研究によれば、アメリカのメノナイト移民の口承には、二度と



写真5 トラクセルヴァルト城の牢獄。筆者撮影(2012年)

帰らぬ旅に出る前にエメンタールのハスリバッターの故郷を訪ね、処刑場の近くの井戸の水を飲む者がいたと伝えるものがある。それは聖者の泉の聖なる水さながらである。<sup>92)</sup>

ところでハスリバッターの歌は一七世紀半のスイス系再洗礼派とオランダ・メノナイトの交流と合流の過程で『殉教者の鏡』に収録されたのだが、それは一六八五年版からであり、しかも三つの奇跡の詳細はそこには書かれていない。「三つの特別なこと」(drie besondere teykenen)と記されているだけである。<sup>93)</sup> アメリカの宗教史家デイヴィッド・ウィーバー・ザーカーは、山岳地帯のスイス再洗礼派とは違って知的に洗練されていたオランダ・メノナイトにはこうした奇跡譚は受け入れにくかったからだと推測している。<sup>94)</sup> しかし『殉教者の鏡』はオランダで起きた数多くの奇跡の記録を掲載しているから、奇跡の自身が問題にされたのであろう。すなわちカトリック的な奇跡物語との類似が敬遠されたものと推測される。なお天使の助けに関する信仰は共有されていた。たとえばハーレムで一六三一年に出版された殉教伝——『殉教者の鏡』の土台のひとつ——に収録されたチューリヒ農村部の再洗礼ハンス・ランデイス(一六一四年に処刑)に関する記事には、ゾロトゥルンで逮捕されてガレー船送りの刑を宣告されたものの天使(ein Engel)が彼を解放したとの記事がある。<sup>95)</sup> 天使の助けによる解放は、再洗礼派の聖書の信仰の一部であった。その典拠は、ヘロデ王の命令で投獄されたペテロを天使が解放したことを伝える使徒行伝一二章である。

ここで『殉教者の鏡』に出てくるオランダの奇跡的事象をいくつか検討しておこう。「一五五六年、アムステルダムの北西にあるペーフェルウエイクの熱心な再洗礼派信徒アウグスティン・デ・バックカーが処刑された。処刑方法は残忍で、梯子に縛りつけたまま火中に投じるといったものであった。しかしこれを命じた市長は突然重病に罹り、良心の呵責に苛まれ、おそろしい声で『ピートと薪、ピートと薪』と繰り返しなり、三日後に死んでしまった。それはこの市長が命じたような残酷な行為をお許しにならない全能の神がわたしたちの世界を見ておられるしるしである」。

それだけでなく、処刑前にデ・バックカーは市長に向かって「わたしは三日後にあなたを神の裁きの庭に立たせるだろう」と告げていた。<sup>(97)</sup>一五三一年、マルティン・デ・シルダーという再洗礼派指導者は、六人の仲間の信徒が処刑されたとき、刑場に行く道にかかっている橋に向かい、「多くの信仰深い人たちがこの橋を渡らされたが、もうそういうことはあつてはならない」と語った。すると「まもなく激しい嵐が起き、洪水が襲つてきてその橋を壊し、押し流してしまった」<sup>(98)</sup>。これらは迫害者に対する神罰の物語だが、為政者の側からみれば「害悪魔術」そのものである。

なおゲリー・ウエイトの研究によれば、オランダ再洗礼派の指導者たちのなかには、メノー・シモンズがそうであるように、魔術を否定するだけでなく悪魔の存在も現実世界への介入も否定し、悪魔の誘惑や攻撃を人間の内面的葛藤と捉え、悪魔や魔女が病を引き起こすこともないと教える人たちがいた。彼らは「脱魔術化」の旗頭であつたといえるかもしれない。しかし同時に、たとえばハンス・デ・リース（アルクマールの牧師）のように錬金術と医療を融合させた指導者もいる。さらにはヘリット・フランケン（ライデンの執事）のように、つねづね奇跡を追い求め、クリスマスの日に空中に天使たちと銅葉桶が出現するのを見たと言者までいた。スイスや周辺地域の農村部に住む再洗礼派だけが奇跡と魔術の世界に浸つていたとはいえないのである。<sup>(99)</sup>

モラヴィアの地で自給自足的な財産共有コロニーを形成していたフッター派の事例もあげておこう。フッター派には都市の手工業者が比較的多かったといわれるが、だからといって合理主義的であつたわけではない。「脱魔術化」の推進者であつたわけでもない。彼らの長老たちが書いた『フッター派兄弟団草創期の年代記』には、一五七四年にハンス・ブラットナーというフッター派信徒が逮捕されて斬首されたときに起こつた興味深い出来事が記録されている。「刑場にある女性が走つてきた。彼女は無実の罪で処刑された人の血を飲むと持病のでんかん発作が癒されると聞かされていた。刑吏がちょうど剣を振りおろし、群衆がどよめいた瞬間に彼女は刑場に到着し、両手で彼の血を受

けとめて飲んだのであった。そして彼女の病氣は治ったという。このことは兄弟シュトツフェル・ツイーグラー自身が彼女から聞いたことである<sup>(10)</sup>。これはまさに魔術的な民間療法の実践であった。なおこれと似かよった飲血療法はドイツ語圏ヨーロッパのあちこちで確認できる<sup>(10)</sup>。

(四) 殉教者ミヒヤエル・ザトラー

ミヒヤエル・ザトラーは成人洗礼、現世の悪からの分離、無抵抗主義などを定めた『シユライトハイム信仰告白』(一五二七年)の作成によってスイス系再洗礼派の思想的立場を明確化させた功労者であり、初期の偉大な殉教者でもある。西南ドイツ出身のベネディクト会士であったザトラーは、一五二五年、宗教改革と農民戦争の混乱期にシユヴァルツヴァルトのザンクトペーター修道院を脱走、スイス(チューリヒ)の再洗礼派に加わった。それは修道院のなかで聖書研究を行った末の決断であった。その後ザトラーは西南ドイツ(ヴュルテンベルク)の小都市ホルプやロットエンブルク・アム・ネカーで短いあいだ活動し、逮捕されて拷問と裁判を受け、一五二七年五月に火刑に処せられた<sup>(10)</sup>。裁判の経過については複数の証言があるが、注目されるのは再洗礼派の同労者ヴィルヘルム・ロイブリがチューリヒのツオリコン、グリユニンゲン、バーゼル、アペンツェルの再洗礼派教会に書き送った手紙の内容である。そこにはザトラーの絶命の瞬間についてこう書かれている。

彼は大声で「父よ、わたしの魂を御手に委ねます」と叫びました。そして彼の命は絶たれたのです。主は永遠にほむべきかな、アーメン。しかし死刑執行人は彼の右手を焼き尽くすことはできませんでした。心臓も同じです。死刑執行人がそれを切り裂き、天に向かって血潮が噴き出すまでは。そして夜になると刑場の上空に太陽と月

(sun und mon) が三時間にわたって現れ、そこには黄金の文字 (guld buochstaben) が見えました。それは非常に明るい光でしたので、だれもが真昼のようだと感じました。<sup>105</sup>

ここには一六世紀前半の再洗礼派の奇跡観が如実に表れている。そこにはカトリック教会の聖人崇敬の名残がある。宗教改革時代は殉教者の大量出現の時代であり、信徒たちのあいだでは壮絶な死を遂げた偉大な指導者や無名の信徒への思慕と崇敬の念が高まっていた。カトリックの宣教師たちもプロテスタントの伝道者たちも激しい宗派対立や宗教戦争のなかで命を落としていた。そしてプロテスタント世界でも大冊の殉教者伝が編まれることになる。再洗礼派の『殉教者の鏡』も、そうした機運のなかで生まれたものである。<sup>104</sup>そしてそこには不可思議な奇跡の数々が登場する。もちろんスイス人やドイツ人だけが奇跡の主人公であったわけではない。一五五四年にフランドル地方のヘントで処刑されたダヴィッドという再洗礼派は身体が燃え尽きたのに頭を動かすことができたという。それは「明らかに奇跡」だと記されている。フリースラントのレーワルデンで投獄されたある女性信徒は(神の)声に導かれてみごとく脱獄したが、それは「神の奇跡の手」によると述べられている。ただし当局側は「魔術」が使われのではないかと疑った。<sup>105</sup>

### おわりに

ヴェーバーのいう「脱魔術化」が再洗礼派の信徒たちのあいだで順調に進んだとは考えられない。再洗礼派は、一部の知識層を除けば、神の意志や摂理が地上の人間を支配し、星辰がこの世の諸事象に影響を与えるというコスモロ

ジーを長らく保ち、奇跡と神癒を信じ、殉教者を礼賛し、悪魔の攻撃を真剣に防ごうとして祈りや呪文を一心不乱に唱える人たちである。このことは、一六世紀から現代まで、ヨーロッパにおいてもアメリカにおいても、数多くの事例によって確かめられる。

ヴェーバーの合理化論・脱魔術化論・近代化論にはそれ自体に「魔力」があり、多く歴史家たちがあたかも魔術にかかったようにその代弁者として発言してきた。ただし最近では、再洗礼派の奇跡信仰を正面から扱おうとする研究者もいる。シドニー・ペンナーがそうである。ただしペンナーも、再洗礼派は迫害者たちから魔術の嫌疑をかけられることを警戒し、奇跡について多くを語らなくなり、生活面の規律化を第一の目標としたと論じており、奇跡と魔術の世界を重視しているとはいえない。<sup>10)</sup>

近年においては多くの文脈でヴェーバーの脱魔術化論は批判されており、現実世界は「脱魔術化」と「再魔術化」(re-enchantment)を繰り返していると主張する論者もいる。啓蒙の科学の非科学性やロマン主義の魔術性を指摘する思想史家もいる。現代の都市社会や消費社会を「再魔術化」の概念で捉える社会学者もいる。<sup>10)</sup> いずれにしても、ヴェーバーの脱魔術化論は宗教改革の時代を重要な起点とする議論であるから、ヴェーバー批判はその時代に遡って実証的に行わなければならない。本稿はそうした試みの一環である。現段階の結論として強調したいのは、再洗礼派(わけてもメノナイトとアーミッシュ)のあいだでは近代的なるものを内包する「脱魔術化」の波は起きていないことである。むしろ指摘すべきは魔術的世界観の保存ないし残存である。その点で一六世紀に遡る再洗礼派の近代史は一種の反近代史なのである。

最後に付言すれば、魔術的民間医療に代表される古い伝統が継承されていなければ再洗礼派運動そのものが存続しえなかったのではないかと筆者は考えている。また宗派を超えた民衆レベルでの連帯や共存の模索も、そうした古い

伝統が共有されていたからこそ生じたのだと筆者は想定している。<sup>(16)</sup> 再洗礼派が妥協なき「脱魔術化」のチャンピオンであったとすれば、スイスであれアルザスであれ、西南ドイツであれオランダであれ、オーストリアであれモラヴィアであれ、またアメリカであれカナダであれ、周辺の異宗派の民衆は彼らを敬遠ないし排斥したであろう。弱者どうしの助け合いや医術の交流もなかったであろう。スイス系再洗礼派が国家教会（改革派）に所属する共鳴者たちの助けによって、たとえば隠れ家や飲食物の提供、抜き打ち捜査に関する情報提供によって生き延びることができたことについては、別稿で論じたとおりである。<sup>(16)</sup>

なお再洗礼（とくにメノナイトとアーミッシュ）のあいだでの魔術の受容度の高さは、彼らが中世後期の神秘主義の影響を受け、かつ一七世紀の敬虔主義に感化されていたこととも関係していると思われる。この点についてはデラウェア大学の若手研究者アレクサンダー・エイムズによる優れた研究があるので、稿を改めて論じてみたいと思う。<sup>(17)</sup>

註

(1) 宗教改革と「近代」のナラティヴの概略についてはエルンスト・トレルチ『プロテスタントイズムと近代世界Ⅰ』堀孝彦ほか訳（ヨルダン社、一九八四年）、七二―二六五頁を参照。江口再起『ルターの脱構築——宗教改革五〇〇年とポスト近代』（リトン、二〇一八年）、第六章も見よ。なお本稿ではMagie (magic) とZaubererei (sorcery) を同義語と位置づけて「魔術」と訳し、中世・近世の悪魔学者たちのいうようなサバトで悪魔と契約を結んだ（と疑われ、断罪された）魔女の所業については「魔女の妖術」あるいは片仮名で「ウィッチクラフト」(Hexerei/witchcraft) と訳し、便宜的に区別している。なおマックス・ヴェーバーの「脱魔術化」(Entzauberung/disenchantment) は「脱呪術化」とも訳されており、魔術と呪術は同義語ないし類義語として扱われてきた。人類学者や宗教学者のなかにはMagieとZauberereiの概念的な区別を試みる向きもあるが、西欧の歴史研究に用いる一次史料においては概念も用語も錯綜しており、区分は難しい。なお宗教改革時代の神聖ローマ帝国の刑法すなわち一五三二年のカール五世刑事裁判令（カロリナ）は「悪魔との契約」を取締りの対象とはしておらず、人間やその財産に損害を与える魔術（すなわち害悪魔術）を禁止し、違反者を火刑に処すると定めているだけである（第一〇九条）。一方、無害な魔術は処罰対象とはされていない。Die

- Penliche Gerichtsordnung Kaiser Karls V. von 1532 (Carolina), hg. v. Gustav Radbruch, 6. durchgesehene Auflage, Stuttgart 2000, Art. 109. 小林繁子『近世ドイツの魔女裁判——民衆世界と支配権力』(ミネルヴァ書房、二〇一五年)、一三〇—一三二頁を参照。
- (2) Max Weber, *Wissenschaft als Beruf* 1917/1919, *Politik als Beruf* 1919, Studienausgabe der Max-Weber-Gesamtausgabe, hg. v. Wolfgang J. Mommsen und Wolfgang Schluchter, Tübingen 1994, 9, 22.
- (3) Steven P. Marrone, *A History of Science, Magic and Belief from Medieval to Early Modern Europe*, London/New York, 2015, 69-72, 213-226.
- (4) 「パン裂き」についてはスイス再洗礼派（スイス兄弟）の指導者ミヒヤエル・ザトララーが編んだ「シユライトハイム信仰告白」（一五二七年）に言及がある。成人洗礼については再洗礼派の論客バルタサル・フープマイアの「信仰者のキリスト教的洗礼について」（一五二五年）に詳しい。出村彰ほか訳『宗教改革著作集8 再洗礼派』（教文館、一九九二年）、九〇六六、八七〇九八頁。
- (5) 再洗礼派運動の全体像については永本哲也・猪刈由紀・早川朝子・山本大丙編『旅する教会——再洗礼派と宗教改革』（新教出版社、二〇一七年）が最新の情報を提供している。宗教改革の帰結としての「宗派化」ないし「多宗派化」の事例として再洗礼主義諸派を概観した論考としては踊共二編『記憶と忘却のドイツ宗教改革——その起源と宗派化の諸相』森田安一編『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』（教文館、二〇〇九年）、第二章がある。現代の再洗礼派とプロテスタント正統派（とりわけスイスの改革派教会）の「和解」をテーマにした研究として踊共二編『記憶と忘却のドイツ宗教改革——語りなおす歴史一五二七—二〇一七年』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）、第二章も参照。なおスイスで最後に再洗礼派が処刑されたのは一六一四年である。Vgl. Barbara Bötschi-Mauz, 'Täufer, Tod und Toleranz: Der Umgang der Zürcher Obrigkeit mit dem Täuferlehner Hans Landis', in: Die Zürcher Täufer 1525-1700, hg. v. Urs B. Leu und Christian Scheidegger, Zürich 2007 [以下Leu und Scheidegger (Hg.) Die Zürcher Täufer 1525-1700], 165-202.
- (6) マックス・ヴェーバー『プロテスタントイスマの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳（ワイド版岩波文庫、一九九一年）、二六三—二八六頁。
- (7) エルンスト・トレルチ『プロテスタントイスマと近代世界Ⅱ』芳賀力・河島幸夫訳（ヨルダン社、一九八五年）、一四〇—一三二頁。
- (8) Stuart Clark, *Protestant Witchcraft, Catholic Witchcraft*, in: Darren Oldridge (ed.), *The Witchcraft Reader*, 3<sup>rd</sup> ed., London/New York, 2019, 161-173. なお再洗礼派研究者ラリー・ウェントは魔女裁判と再洗礼派迫害の関連を探る研究を行っているが、彼が明らかにしたのは立件と有罪化の手法の共通性と連続性であり、再洗礼派自体（とくにメノナイト）については悪魔や魔女の存在を認めない集団だと解釈している。Cf. Gary K. Waite, *Evilizing the Devil's Minions: Anabaptists and Witches in Reformation Europe*, University of Toronto Press, 2007, 25-33, 130-165, 197-205.

- (9) Catherine Gascho, The Angels' Charge, in: Lorilee Craker (ed), *Homespun. Amish and Mennonite Women in their own Words*, Harrisonburg, Virginia, 2018 [以下 Craker (ed), *Homespun* と略す], 123-125.
- (10) Katie Shrock, God's Protecting Hand, in: Craker (ed), *Homespun*, 127-133.
- (11) Sherry Gore, Zippy, in: *Homespun*, 143-148.
- (12) Ervina Yoder, The Lord is My Rock, in: *Homespun*, 83-87.
- (13) Brad Igo (ed), *Amish Voices. A Collection of Amish Writings*, Harrisonburg, Virginia, 2019, 189.
- (14) Briefe und Schriften oberdeutscher Täufer 1527/155. Das Kunstbuch des Jörg Probst Kotenfelder gen. Maler (Burgerbibliothek Bern, Cod. 464), hg. v. Heinold Fast und Gottfried Seebag, Heidelberg 2007, 676f.
- (15) マックス・ウェーバー『宗教社会学』武藤一雄・蘭田宗人・蘭田担訳（創文社、一九七六年）、三〇一五、三五〇三九頁。
- (16) 宗教改革史研究者ロバート・スタリプナーは信徒による「準秘跡」の魔術的使用を「一種の万人祭司主義の民衆カトリック版」（a kind of popular Catholic version of the priesthood of all believers）と呼び、その能動性や荒々しさを描きだしている。民衆の祈りないし呪文は神と人との「互酬性」ないし「双務性」を特徴としており、祈りを捧げても正しく儀式を行っても健康や収穫が得られない場合は怒りをあらわにし、聖像を打擲したり泥のなかに捨てたりすることもあった。宗教改革者たちはこうした民衆文化を厳しく批判したが、プロテスタントたちも神や悪魔、デーモンや亡霊がこの世で活動して災害や病や死をもたらした、天体が地上の出来事を左右するとういふ伝統的なコスモロジーを保っており、その限りにおいて脱魔術化は困難であった。Robert W. Scribner, *Popular Culture and Popular Movements in Reformation Germany*, London, 1987 [以下 Scribner, *Popular Culture* と略す], 147. おハルギーの中世史家ルドー・シリスは、呪文を唱えたり魔除けを使ったりする行為は神を「威圧」することだと分析している。それは崇拜の見返りとして現世的利益を求めた行為だからである。ルドー・J・R・シリス『異教的中世』武内信一訳（新評論、二〇〇二年）、七六―七八、三一九―三二二頁。
- (17) 'Lieber Gott, nun schlaf ich ein./ Schicke mir ein Engellein./ Lasz es bei dem Bette stehen./ und nach meinem Herzen seh'n./ Dass es werde gänzlich rein./ Wie es muss im Himmel sein. Amen.' Rebecca Bontrager Graber, *My Amish Story. Breaking Generations of Silence*, Abbotstford, Wisconsin, 2017, 76-79. 民間信仰の世界では一般信徒が聖職者を模倣して悪魔祓りに近い儀式や行いをするこの時代にもある。一九世紀の例をあげれば、ペンシルヴァニア州バークス郡の治療師コンラート・レーバー (Conrad Reber, 1778-1817) は「丹毒 (Wild-Fire) の治療のため」「丹毒を去れ、去れ、去れ」(Flick, Flick, Flick)、「引け、引け、引け」(Zick, Zick, Zick) と唱えたが、これは丹毒を擬人化ならし悪魔扱いして祓く儀式でもある。 Cf. Patrick Dommyer, *Powwowing in Pennsylvania. Healing, Cosmology, and Tradition in the Dutch Country*, Kutztown, Pennsylvania, 2016, 16.

- (18) Rebecca Bontrager Graber. *op. cit.*, 84f.
- (19) *Ibid.*, 141-150.
- (20) ただしデーヴィッド・クリーベルの研究は、少ないながら、その残存の確かな証拠をあげている。たとえばペンシルヴァニア州ランカスター郡のある女性（オールドオーダーアーミッシュ）は自分の手のひらで患者の身体をなで、痛みをとるパウワウ治療を行ってきたという。保守派のアーミッシュユアメノナイトは、緊急時以外、強い薬や病院での医療を避け、湿布や軟膏、薬草やトニック、カイロプラクティックやマッサージを好むため、古いパウワウ治療に再接近しやすい。David Kriebel, *Powwowing Among the Pennsylvania Dutch: A Traditional Medical Practice in the Modern World*, University Park, 2007 [以下 Kriebel, *Powwowing Among the Pennsylvania Dutch* と略す]、176-185, 196-207, 216f.
- (21) 関哲行・踊共二『忘れられたマイノリティ——迫害と共生のヨーロッパ史』（山川出版社、二〇一六年）、一九二—二〇八頁を見よ。オハイオ州バークホルツでは二〇一一年にアーミッシュのビショップとその取り巻きが信徒たちを執拗に虐待する事件が発生し、複数の逮捕者を出したが、そのビショップは神と悪魔の日常生活への関与をつねに身近に感じていた。彼は日しろ、猫や犬や蛇はサタンの化身であると語っていた。息子に憑依した（という）悪霊を祓ったこともある。さらに彼は各種の「前兆」（signs）も信じていた。Donald B. Kraybill, *Renegade Amish, Beard Cutting, Hate Crimes, and the Trial of the Bergholz Barbers*, Baltimore, 2014, 57f. 彼の思考と行動の背景には古イギリス系移民の俗信があった。たゞは悪魔は黒い犬に化けるとか、犬の遠吠えは死の前兆であるといったものがある。Cf. Thomas R. Brendle & Claude W. Unger, *Folk Medicine of the Pennsylvania Germans*, New York, 1970 [以下 Brendle & Unger, *Folk Medicine* と略す]、208-210. 亡びた古文化はアーミッシュの関心された世界を保持していったと考えられる。
- (22) Ervin Beck (ed), *MemoFolk: A Sample of Mennonite & Amish Folklore*, Scottsdale, Pennsylvania, 2005 [以下 Beck (ed), *MemoFolk* と略す]、57-59. メノナイトを対象とする民俗学的研究全般にわたっては Ervin Beck, *The Study of Mennonite Folklore and Folklife*, in: *Mennonite Quarterly Review* 81 (2007), 107-124 に詳し。
- (23) Johann Georg Hohman, *Der lange verborgene Freund*, Ephrata, Pennsylvania, 1828 [以下 Hohman, *Der lange verborgene Freund* と略す]。本書すなわち『失われた旧友』（初版一八二〇年）はペンシルヴァニア州バークス郡に住んだカトリック教徒の出版企画者ヨハン・ゲオルク・ホーマンが編んだものであるが、内容は超教派的であり、ドイツ系移民のあいだで広く読まれ、ベストセラーとなった。英訳も一八四八年以降に出ている。系移民以外の読者も獲得している。研究者向けの最新の英訳として John George Hohman, *The Long Lost Friend*, ed. by Daniel Harris, Woodbury, Minnesota, 2018 がある。この本は後述する一八世紀イギリスの複数の魔術書の内容と重なる要素を数多く含んでいるが、危険性のない共感魔術による病気治療や安全確保、魔除け、魔女退治など

- を中心としており、人や家畜に危害を及ぼす「黒魔術」は少ない。ただし三本の木片を使って泥棒を呪い、盗んだ物を返させる術などは邪悪な印象を与える。Hohman, *Der lange verborgene Freund*, 73f. 同じ著者が一八一三年に出した「窮地にある友」では三本の釘を使う儀式が収録されており、いっせう危険な印象を受ける。Johann Georg Hohman, *Der Freund in der Noth Or: The Friend in Need*, ed. by Patrick J. Donmoyer, Kutztown, 2012. [以下Hohman, *Der Freund in der Noth* と略す], 58-60. なおウッツタウン大学ペンシルヴァニア・ドイツ文化遺産センターの民俗研究家パトリック・ドンモイヤーによればエゼキエル書を使った止血は二〇世紀にも行われていた。また一九世紀まではルター派の牧師のなかにも止血のパウワウ治療を認める者や、みずから行う者がいた。Patrick J. Donmoyer, *Powwowing in Pennsylvania. Branches of the Ritual of Everyday Life*, Morgantown, Pennsylvania, 2017. [以下Donmoyer, *Powwowing* と略す], 36-42. なおパウワウ治療師は病氣や火事の炎まで擬人化し、「悪魔祓いの要領で対処する」ことがある。「火よ、わたしは万事を為し万物を造った神の力によって命じる。燃え広がることなく消えよ」といった具合である。Hohman, *Der Freund in der Noth*, 86f. 火消しの魔術は後述する一八世紀ドイツの『シプシーの書』にも出てくる。Romanus Büchlein oder Gott der Herr bewahre meine Seele, meinen Aus- und Eingang, von nun an bis in alle Ewigkeit, Amen, Halleuja, [1788], 5f. なお北米の多くのマーマンやメソナイターたちの故郷であるメソ州には、「いほの数だけ糸に結び目をこくり、それを兩槓の下に埋め、雨が降って糸が腐ったらいほは消える」という民間療法が伝えられている。Johann Emil Rothenbach (Hg.), *Volksthümliches aus dem Kanton Bern*, Bern 1876. [以下Rothenbach, *Volksthümliches* と略す], Nr. 468, 469. いほ治療については本稿の註(72)を参照。
- (24) Beck (ed.), *MemoFolk2*, 63f.
- (25) Donmoyer, *Powwowing*, 81f., 137-141, 171-173.
- (26) Joseph Warren Yoder, *Rosanna of the Amish*, Harrisonburg, Virginia, 1995 (1st edition: 1940) [以下Yoder, *Rosanna* と略す], 9-13.
- (27) Yoder, *Rosanna*, 208-212.
- (28) Yoder, *Rosanna*, 144-146. ロザンナが用いた方法は不明だが、たとえばホーマンは鼻血が止まらないときは卵の殻にその血を三滴たらし、これを火中に投じればよいと記している。Hohman, *Der Freund in der Noth*, 80f. 「わたしは緑の森に出かけ、三つの冷たい泉を見つけました。一つめは勇氣、二つめは善良、三つめは止血という名でした」という神秘的な呪文を唱える方法も伝えられている。Hohman, *Der lange verborgene Freund*, 43. リューマチの痛みを鎮めるには「父と子と聖霊の名において」謙虚に祈り、「どんな毒もあなたの全身を害する」ことがないやうに」といった言葉を（紙片に）書き記して患者に与えればよいとされる。炎症(Rothlauf)を治すには「炎症のドラゴン」は川の向こうに一緒に飛んでいった。炎症がなくなったらドラゴンも消えた」と唱える。Hohman, *Der lange verborgene Freund*, 20, 46f. ホーマンについては註(23)を参照。なお幼児の消耗症ないし栄養失調症のパウ

- ワウ治療は前掲の『メンノーフォーク』にも出てくるため、現代まで受け継がれていると考えられる。メノナイトのエルマ・シラーは消耗症の息子を治療師に診てもらったが、彼の治療法は小声で祈りを唱えながら長い糸で頭からつま先まで身体を計測し、病を糸に移すものであった。Beck (ed.), *MennonFolk* 2, 59f. 後述するように糸による身体の計測と病の吸収の治療術には多様な形態がある。
- (29) Kriebel, *Ponwowing*, 62.  
 (30) Yoder, *Rosanna*, 223-226. 「」内は筆者の補足。以下、同様である。  
 (31) Yoder, *Rosanna*, 203-205.  
 (32) Erza Grumbine, *Folk-Lore and Superstitious Beliefs of Lebanon County, Mt. Zions, Lebanon County, Pennsylvania*, 1905, 263-265.  
 (33) Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd. 3, hg. v. Eduard Hoffmann-Krayer et al., Berlin 1974, 489f.  
 (34) Wiedergänger und Weiße Frauen, Sagen aus Baden und Württemberg, hg. v. Hans Brüstle, Freiburg im Breisgau, 1997, 50.  
 (35) Rothenbach, *Volksständliches*, Nr. 579.  
 (36) 杉崎泰一郎『欧州百鬼夜行抄——「幻想」と「理性」のはざまの中世』(原書房、二〇〇二年)、二一八―二三〇頁を参照。  
 (37) C. Eugene Moore, *Amish Folk Tales and Other Stories of the Pennsylvania Dutch*, Atglen, Pennsylvania, 2011, 29-35.  
 (38) Hohman, *Der lange verborgene Freund*, 34f. ホーヤムにこの注(33)を見よ。  
 (39) Alois Lütolf, *Sagen, Bräuche, Legenden aus den fünf Orten Luzern*, Uri, Schwyz, Unterwalden und Zug, Luzern 1862 [以て Lütolf, *Sagen, Bräuche, Legenden* へ略す]、542-544/ Nr. 506. これはルンメルン州ウイリザウの例である。  
 (40) Leroy Beachy, *Unser Leit. The History of the Amish*, vol. 1, Millersburg, Ohio, 2011, 327f.  
 (41) *Ibid.*, vol. 2, 210-212. エリザベスタウン大学アーミッシュ研究所(ヤングセンター)の統計によればアメリカ合衆国のアーミッシュ人口は約三三万五〇〇〇人である(二〇一八年現在)。なおカナダについては約五〇〇〇〇人である。https://groups.etown.edu/amishstudies/statistics/population-2018/ メノナイトの人口は、Global Anabaptist Mennonite Encyclopedia Online によれば合衆国に約五三万九〇〇〇人、カナダに二四万四〇〇〇人である(二〇一五年現在)。https://gameo.org/World\_Mennonite\_Membership\_Distribution
- (42) メノナイトの歴史を起源から現代まで追った概説として Diether G. Lichdi, *Die Mennoniten in Geschichte und Gegenwart. Von der Täuferbewegung zur weltweiten Freikirche*, Weisenheim am Berg 2004 を参照。アーミッシュに関心を示す包括的な概説は Donald B. Kraybill, Karen M. Johnson-Weiner, and Steven Nolt, *The Amish*, Baltimore, Maryland, 2013 [以て Kraybill et al., *The Amish* へ略す] である。現代アーミッシュの生活と文化を短く紹介した書物としては Donald B. Kraybill, *Simply Amish. An*

- Essential Guide from the Foremost Expert on Amish Life*, Harrisonburg, Virginia, 2018 が優れている。モーロップにおけるアーメンシユの起源から北米への移住、分裂や多様化の歴史にについては Steven M. Nolt, *A History of the Amish*, 3<sup>rd</sup> edition, New York, 2015 を見よ。モノナイトやアーメンシユを含むメンシルヴァニアのドイツ系移民の文化を総合的に論じた書物としては Simon J. Bronner & Joshua R. Brown, *Pennsylvania Germans: An Interpretive Encyclopedia*, Baltimore, Maryland, 2017 が最新である。本書は建築や建築文化、民芸・装飾文化、食文化、民間伝承、民間医療も扱っている。
- (43) Abbé C. Tournier, *Le catholicisme et le protestantisme dans le pays de Montbéliard*, Besançon, 1894, 194f.
- (44) Hohman, Der lange verborgene Freund, 21.
- (45) Wolfgang Bauer (Hg.), *Das Sechste und Siebente Buch Moses*, Berlin 1996 を参照。詳しい注釈を伴う新しい英訳として Joseph Petersen (ed.), *The Sixth and Seventh Books of Moses*, Newburyport, Massachusetts, 2008 がある。第二次大戦前のモノナイトの治療師クリスチャン・エビーがこの魔術書を使った事例が報告されている。この治療師はカナダのオンタリオ州ウォーターロー郡に住んでいたが、アメリカから訪ねてくる患者を診つづけたこと。Margaret Loewen Reimer, *Approaching the Divine: Signs and Symbols of the Christian Faith*, Eugene, Oregon, 2018, 71 をおぼえん人牧師クルー・ロッセ (ルター派) によれば二〇世紀半ばのスイスにおいて『モーセ第六・第七書』を用いた魔術の事例が数多くみられる。ほとんどの村人がこの書物を所持していたケースもあると云ふ。Kurt Koch, *The Devil's Alphabet*, Grand Rapids, Michigan, 1969, 76.
- (46) Albertus Magnus bewährte und approbire sympathetische und natürliche egyptische Geheimnisse für Menschen und Vieh, Brabant, 1857, 48, 61.
- (47) これは感染ないし移転の魔術であるが、赤い (熱い) ものを治すには赤い (熱い) ものをใช้ในการとどう共感魔術でもある。黄疸を治すために内部をくり抜いたニンジンに患者の黄色い尿を流し込ませる術も同様である。Dommyer *Painwoing*, 116-119, 166.
- (48) Jean Séguy, Religion and Agricultural Success. The Vocational Life of French Anabaptists from the Seventeenth to the Nineteenth Centuries, in: *Mennonite Quarterly Review* 47 (1973) [ビル・セグイ, Religion and Agricultural Success と略す], 213-215; John A. Hostetler, *Amish Society*, Baltimore, Maryland, 4<sup>th</sup> edition, 1993, 340f. モーロップからアメリカに渡った再洗礼派が魔術的世界観とは無縁ではなかったと言えなくとも本稿に基づいて検討した諸事例から明らかであり、その点でセグイの議論には問題がある。
- (49) Charles Roy, *Us et coutumes de l'ancien pays de Montbéliard, et en particulier de ses communes rurales*, Montbéliard, 1886, 145. "Les anabaptistes ne semblent pas avoir innové en matière de guérison magique et de sorcellerie." なるロップはモノナイトアーメンシユを区別せず、同系統の人々をみなしている。
- (50) Jacques Klopfenstein, *L'anabaptiste ou le cultivateur par expérience: almanach nouveau*, 183, «Medecine Rurale», «Medecine vétérinaire»,

- «Les religions diverses dans les États-Unis» へ題する記事や図表 (頁は与らねばならぬ)。
- (51) Séguy, Religion and Agricultural Success, 200. Cf. Jean Séguy, *Les Assemblées anabaptistes mennonites de France*, Paris, 1977, 503.
- (52) 踊共二「アーミンニユの起源——寛容思想史の視点から」『武蔵大学人文学会雑誌』四二巻一・二号 (二〇二二年) 九一—一五頁を参照。
- (53) Charles Ferdinand Morel, *Abregé de l'histoire et de la statistique du ci-devant Eché de Bale*, Strasbourg, 1813, 244f.
- (54) Der Neue Amerikanische Kalender auf das Jahr unseres Helandes Jesu Christi 2017, Baltic, Ohio, 111頁は筆者が現地調査で入手した二〇一七年版を利用した。
- (55) Neüvermehrtes geistliches Lust-Gärtlein frommer Seelen: das ist Heilsame Anweisungen und Regeln zu einem gottseligen Leben wie auch schöne Gebätt, Basel 1727.
- (56) Neu vermehrtes geistliches Lust-Gärtlein frommer Seelen: Das ist Heilsame Anweisungen und Regeln zu einem gottseligen Leben, Verlag von den Amischen Gemeinden in Lancaster County, Pennsylvania, 2010 [古く geistliches Lust-Gärtlein へ略す]。なおカナダのアーミンニユ研究者キース・ルーンは『魂の小やう庭』にはルター主義的でない要素 (記念説的な聖餐理解) がみられ、かつ信仰の実践が強調されてゐるから、これはルター派には属さない敬虔主義者の作だと推測してゐる。Cf. David Luthy, *Our Amish Denotional Heritage*, Ayimer, Ontario, 2016, 106-108.
- (57) geistliches Lust-Gärtlein, 99f.
- (58) Russel D. Earnest et al., *God Bless This House. The Printed House Blessings (Haus-segen) of the Pennsylvania Germans 1780-1921*, Clayton, Delaware, 2015 [古く Earnest et al., *God Bless This House* へ略す], 73.
- (59) Earnest et al., *God Bless This House*, 69.
- (60) Earnest et al., *God Bless This House*, 29-43. 図案はミンギローストに引いて Karl Herr, *Hex and Spellwork. The Magical Practices of the Pennsylvania Dutch*, Boston, Massachusetts, 2002, 54-57. これはミンシルヴァニア州タッチの納屋の装飾でもあるクッタスサイン (星形の図案) に関する解説でもあるが、クッタスサインは「家の祝福」の装飾には共通性がある。
- (61) Earnest et al., *God Bless This House*, 69.
- (62) Earnest et al., *God Bless This House*, 19-21. Cf. Michael S. Bird, *O Noble Heart/ O Edel Herz. Praktur and Spirituality in Pennsylvania German Folk Art*, Virginia Beach, Virginia, 2002, 23-62. Don Yoder, *The Pennsylvania German Broadside*, University Park, Pennsylvania, 2005, 195-225. これらの護符類の起源はオランダ・モローニンにあり、クルー・ロッキは「天国からの手紙」や「火事除け」などのモーニンミットな力を呼び起す呪物だと論じてゐる。Kurt E. Koch, *Okkultes ABC*, Uim 1984 [古く Koch, *Okkultes*

- ABC ヲ略セ], 757f.
- (63) geistliches Lustgärtlein, 103f.
- (64) ルター『早上語録』植田兼義訳(教文館, 二〇〇三年), 三四三頁。
- (65) geistliches Lustgärtlein, 141f.
- (66) Cf. Ole Peter Grell, *Medicine and Religion in Sixteenth-Century Europe*, in: *The Healing Arts, Health, Disease and Society in Europe 1500-1800*, ed. by Peter Elmer, Manchester, 2004, 84-107.
- (67) geistliches Lustgärtlein, 164f. ルターも病気を悪魔と関連づけ、「悪魔によらなければ、神はこの世に病気を送らなむ」と述べ、神は罪を犯した人間に「害を与えることを悪魔に許している」のだと論じている。前掲『早上語録』三四二頁。Cf. Peter Elmer & Ole Peter Grell (eds), *Health, Disease and Society in Europe 1500-1800. A Source Book*, Manchester, 2004, 84-86.
- (68) Scribner, *Popular Culture*, 40f.
- (69) 一七世紀前半の上プファルツ地方でイエズス会士たちが布教(再カトリック化)を行っていたら、彼らは情緒的な悔悛と罪の赦しのための野外礼拝を実施し、夜間に宗教行列を行い、癒しの力のある「ザビエル水」を配り、奇跡の泉の復活を試みたが、その布教地には遠方から多くのプロテスタント民衆がやってくるようになった。Cf. Trevor Johnson, Blood, Tears, and Xavier-Water: Jesuit Missionaries and Popular Religion in the Eighteenth-Century Upper Palatinate, in: Bob Scribner & Trevor Johnson (eds), *Popular Religion in Germany and Central Europe 1400-1800*, New York, 1996 [以下 Johnson, Xavier-Water ヲ略セ], 183-202. 上プファルツには再洗礼派の共同体もあり、北米移民も出している。ただし彼らがイエズス会士の布教と準秘跡に関心を示した証拠はなご。なおプロテスタント地域にも奇跡の泉の信仰が残り、カトリックの巡礼に近い現象がみられたことについては前掲の Grell, *Medicine and Religion in Sixteenth-Century Europe*, 84f. を参照。
- (70) これらの問題についてキエロ(ホヘミア)の事例をもとにきわめて説得的な概観を行っているのはタウイド・トミチェクである。David Tomiček, Magic and Ritual in Late-Medieval and Early-Modern Popular Medicine, in: *Magic and Magicians in the Middle Ages and the early modern Time. The Occult in pre-modern Sciences, Medicine, Literature, Religion, and Astrology*, ed. by Albrecht Classen, Berlin, 2017 [以下 Classen (ed.), *Magic and Magicians ヲ略セ*], 591-608. なおフランク・イルジークラー、アルノルト・ランツァ『中世のアウトサイダー』藤代幸一訳(白水社, 二〇〇五年)はクルンの事例をもとに近世ドイツの「魔法のサブカルチャー」について詳しく論じている。そこには奇妙な呪文を使って悪魔祓いをする司祭を追い払う民間の魔術師の対抗的行動が描かれている(第七章, 一九八頁)。なおトレヴァー・ジョンソンは聖職者(エリート)の宗教と民衆の宗教をリジッドに区別するのは無意味だと指摘している。Johnson, Xavier-Water, 202.

- (71) Hans Zahler. Volksglaube und Sagen aus dem Emmenthal. in: Schweizerisches Archiv für Volkskunde 15 (1911), 1-17.
- (72) Edwin Miller Fogel. *Beliefs and Superstitions of the Pennsylvania Germans*. Philadelphia, 1915, 324/no. 1728. この治療についてはタペネギを擦ってそれを雨桶の下に埋めるやり方や小石を擦ってそれを墓穴に捨てりやり方も記録されている。 *Ibid.*, 316/nos. 1675, 1678.
- (73) Litolf Sagen. Bräuche, Legenden, 545/Nr. 509. リネートルフはツマーラーのよう漏斗を使った祈り(呪文)すなわち「牧場の祝福」(Alpsegen)の内容も伝えている。「ホー・ホー・ホーク・ホー・ホーク・ホー・ホー」「主イエス・キリストよ、神よ。この牧場に属するすべての身体と魂をすべて名誉と財産を守りたまえ」といったものもある。 *Ebd.*, 546/Nr. 511.
- (74) Staatsarchiv des Kantons Bern [以下StABEと略す] N Rubi 90. Segen, Rezepte. Oberargau 1790, 26. ホーレンの著作に出づべし二本の釘(なぐし木片)の魔術については註(83)を見よ。
- (75) 再洗礼派が寛容の対象であったオランダのごうは Gary K. Waite. Demonic Affliction or Divine Christisement? Conceptions of Illness and Healing amongst Spiritualists and Mennonites in Holland, c.1530-c.1630, in: Marijke Gijswijt-Hofstra et al. (eds), *Illness and Healing Alternatives in Western Europe*. New York, 1997 [以下Waite, Demonic Affliction と略す], 59-79 や参照。
- (76) Franz A. Stocker. Vom Jura zum Schwarzwald. Geschichte, Sage, Land und Leute. Bd. 1, Aarau 1884, 215-217.
- (77) *Ebd.*, 217f.
- (78) Hanspeter Jecker. Ketzer Rebellen Heiligen. Das Basler Täuferturn von 1580-1700. Liestal 1998, 409f. 近世の理髪師の医療のごうは Shubel Inoue, Heilkundige in der Handwerkszunft. Die Kölner Barbierszunft und ihr organisatorischer Wandel in Spätmittelalter und Früher Neuzeit. in: Dominik Groß et al. (Hg), *Medizingeschichte in Schlaglichtern*. Kassel 2011, 91-97 や参照。
- (79) Universitätsbibliothek Basel Handschriften VB Maser 72. Nr. 2 und 3. Jacob Zehnders, Täuflers zu Waltenstein. Missbrauches des Namens Gottes im Arznen, 1634. この史料はバーゼル市当局が一八世紀にチューリヒの過去の医療事件(神の御名をみだりに唱えたケース)の記録を転写したものである。
- (80) Robert Jütte, Ärzte, Heiler und Patienten. Medizinischer Alltag in der frühen Neuzeit. München 1991, 154.
- (81) StABE BIII 194, 5.
- (82) バーゼル司教領ジュラ地方の再洗礼派の研究者イザーク・チュルヒヤーも再洗礼派の治療師のもとには他派の患者たちが数多く訪れていたと論じている。また一九世紀前半になるとロルジュエモン<sup>1)</sup>の再洗礼派の「共同金庫」から他派の困窮者のために義捐金が渡された例がある<sup>2)</sup>。 Isaac Zürcher. Die Altäufner im Fürstbistum Basel 1700-1890, in: *Mennonica Helvetica* 15/16 (1992/1993), 31-33.
- (83) Hanspeter Jecker. Im Spannungsfeld von Separation, Partizipation und Kooperation: Wie täuferische Wundärzte, Hebammen und

- Arzneyer das «Wohl der Stadt» suchen, in: *Mennonitica Helvetica* 39 (2016), 21-33.
- (84) Yoder, *Rosanna*, 218f., 224. 現代のアーメンシユも医療については宗派間の境を越えており、自然的な医療であればみずから遠方に赴くこともある。たとえばメキシコのヒーラー（クランデーロ）の治療を受ける旅がその実例である。Katzbill et al., *The Amish*, 339, 342f. クランデーロについては網野徹哉『インカとスペイン——帝国の交錯』（講談社現代文庫、二〇一八年）、二七六—二七九頁を参照。これはヘルローの事例であるが、多くの点で示唆的である。
- (85) ルター派は幼児への洗礼を神の祝福と加護のための式典と理解し、悪魔を遠ざける儀礼も残した。またルター派の牧師たちは、洗礼を受けずに死んだ子どもは天国に行けないとは心配する民衆のために、産婆による死産児の緊急洗礼の慣習を黙認することもあった（洗礼前の幼児の魂の救いは「祈り」だけで達成できるというのが公式見解ではあったが）。一方、再洗礼派はまだ自由意志によって罪を犯していない段階の幼児は洗礼前でも天国に迎えられるという強い確信を抱いており、ルター派の信徒たちとは一線を画した。幼児に罪の悔い改めと洗礼が必要ないことは、「心をいれかえて幼な子のようにならなければ天国にはいることはむづから」という聖書の言葉（マタイ福音書一八章三節）によつて明白であった。Cf. Kat Hill, *Baptism, Brotherhood, and Belief in Reformation Germany: Anabaptism and Lutheranism, 1525-1585*, Oxford, 2015, 113-130. 現代アーメンシユの多くがわが子を亡くしたとき「罪の誘惑」を受けると前にその子が死んだことを神に感謝する背景には、上述のような再洗礼派の罪理解がある。本稿の前半で扱った『ファミリーライフ』の記事を参照。
- (86) Ausbund: das ist: Etlche schöne Christliche Lieder. 13. Auflage, Verlag von den Amischen Gemeinden in Lancaster County, Pennsylvania, 1987 [以下 Ausbund と略す], 806-812.
- (87) Ausbund, 812.
- (88) Thieleman J. van Braght, *Der blutige Schauplatz, oder Märtyrer Spiegel der Taufgesinnten oder wehrlosen Christen*, Zweyter Theil, Zweyte Amerikanische Auflage, Lancaster, Pennsylvania, 1814, 600f.
- (89) Thieleman J. van Bragt, *Martyrs Mirror. The Story of Seventeen Centuries of Christian Martyrdom from the Time of Christ to A.D. 1660*, translated by Joseph F. Sahn, Scottsdale, Pennsylvania, 2007 (2<sup>nd</sup> English edition) [以下 *Martyrs Mirror* と略す], 1128f. ノスリッシャーの刎られた首が笑うくだりでは「それは確実に神の怒り (God's wrath) を表している」と英訳されている。
- (90) Alfred Michiels, *Les Anabaptistes des Vosges*, Paris, 1860, 112-117.
- (91) Ausbund, 809.
- (92) Séguy, *Religion and Agricultural Success*, 216.
- (93) 合同の動きはアルザス地方を舞台に一六六〇年に始まるが、それは具体的にはスイス系再洗礼派がオランダ・メノナイトの『ドル

- 「オランダ信仰告白」(一六三三年)を受け入れる形をとりつた。Urs B. Leu, *Letzte Verfolgungswelle und niederländische Interventionen*, in: Leu und Scheidegger (Hg.), *Die Zürcher Täufer*, 254. ただしオランダの本拠地では全面的に受容されたわけではなく。それはこの信仰告白の定める「破門」が厳しすぎると考える人たちがいたからである。なお「アーミンニユは前述のとおり『エルトレンタ信仰告白』の定める破門を厳格に実践しようとする分派である」。 Cf. John D. Roth, Marpeck and Later Swiss Brethren, in: John D. Roth and James M. Stayer (eds.), *A Companion to Anabaptism and Spiritualism, 1521-1700*, Leiden, 2007, 380-384.
- (94) Thieleman J. van Braght, *Het bloedig toneel of Martelaers Spiegel der Doops-gesinde of weereulose Christenen*, Het Tweede Boek, Amsterdam, 1685 [『オランダ Martelaers Spiegel』文庫版], 830.
- (95) David Weaver-Zercher, *Martyrs Mirror. A Social History*, Baltimore, 2016, 92.
- (96) James W. Lowry (ed.), *Hans Landis, Swiss Anabaptist Martyr in Seventeenth Century Documents*, Millersburg, Ohio, 2003, 190f.
- (97) *Martyrs Mirror*, 553; Martelaers Spiegel, 165.
- (98) *Martyrs Mirror*, 439f; Martelaers Spiegel, 32f. 『殉教者の鏡』には(神の)復讐と厳しい罰の物語が数多く収録されている。ただしそれは一六世紀のものが中心であり、一七世紀には「赦し」の主題が支配的になる。これはオランダで再洗礼派が寛容の対象となったことと無関係にはなからざるべきである。 Cf. Tomoji Odori, *God's Vengeance and Forgiveness for Enemies. A new Perspective on the Anabaptist Contribution to the Development of religious Toleration and Reconciliation*, in: *Religious Interactions in Europe and the Mediterranean World: Coexistence and Dialogue from the 12th to the 20th Centuries*, ed. by Katsumi Fukasawa, Benjamin J. Kaplan, and Pierre-Yves Beaurepaire, New York, 2017, 49-65.
- (99) Waite, *Demonic Affliction*, 59-79.
- (100) A. J. F. Zieglischmid (Hg.), *Die älteste Chronik der Huttersischen Brüder*, Ithaca, New York, 1943, 475f.
- (101) Franz Helbig, *Geschichte der Foker*, Hamburg 2013, 397f. これは北米のメーン系移民にも伝わった魔術的医療であるが、ベンジルウマニアには人血ではなくキジバトの血を飲む療法がみられる。 Cf. Brendle & Unger, *Folk Medicine*, 1970, 105.
- (102) 踊共二「再洗礼派運動と農民戦争——『ピチャエル・ザトラーの場合』」『歴史学研究』六二六号(一九九一年)八七〜九六頁。
- (103) Quellen zur Geschichte der Täufer in der Schweiz, Band I, hg. v. Leonhard von Muralt und Walter Schmid, Zürich 1952, 252.
- (104) Cf. Brad S. Gregory, *Salvation at Stake. Christian Martyrdom in Early Modern Europe*, Cambridge, 1999.
- (105) *Martyrs Mirror*, 547, 549. 再洗礼派の奇跡物語は枚挙にいとまがないが、当局側が伝えるものは奇跡というより奇譚に近い。一五五六年、オランダ再洗礼派の指導者ダヴィッド・ヨーリスがバーゼルで死去したとき、支持者たちがその遺体を家に運んで崇拝しているという噂が流れた。ヨーリスの遺体と交われば聖霊が受けられると信じてオランダからやってきた女性信徒もいたという。そ

- のため市当局は遺体を墓から掘りだして焼却するに及んだ。 Cf. Gary K. Waite, *David Joris and Dutch Anabaptism 1524-1543*, Waterloo, Ontario, 1990, 186, 191.
- (106) Sydney Penner, *Swiss Anabaptists and the Miraculous*, in: *Mennonite Quarterly Review* 80 (2006), 207-228.
- (107) 啓蒙からロマン主義にかけての「再魔術化」の諸相を論じた論考として Allison P. Condert, *Rethinking Max Weber's Theory of Disenchantment*, in: *Classen* (ed.), *Magic and Magicians*, 705-740 が有益である。社会学的アプローチから現代の「再魔術化」を論じたものとしてジョージ・リッツァ『消費社会の魔術的体系——デイズニールドからサイバーモールまで』山本徹夫・坂田恵美訳（明石書店、二〇〇九年）や園部雅久『再魔術化する都市の社会学——空間概念・公共性・消費主義』（ミネルヴァ書房、二〇一四年）を参照。なおクルト・コッホは、すでに触れたように牧師として二〇世紀半ばのドイツやスイスでの魔術や超常現象の被害者・加害者の膨大なカウンセンシング事例をもとにした研究を公表し、伝統的宗教が世俗化の波によって衰退する一方、エホバの証人、モルモン教、クリスチャンサイエンス、サイエントロジーなど、終末の待望や現世的幸福・健康などの魔術的達成を特徴とする新宗教や各種のオカルトへの関心は増大していると述べ、二〇世紀を「魔術に開かれた時代」（Zeit für Magie）と呼んでいる。Koch, *Okultes ABC*, 466f. 本稿の註（62）も参照。なお現代の魔女信仰、悪魔崇拜、ネオペイガニズム等についてはW・ペーリンガー『魔女と魔女狩り』長谷川直子訳（刀水書房、二〇一四年）、第六章、第七章に詳しい。
- (108) Cf. Tomoji Odori, *The European Reformation and the Christian Minority in Early Modern Japan*, in: *More than Luther. The Reformation and the Rise of Pluralism in Europe*, ed. by K. Apperloo-Boersma & H.J. Selderhuis, Göttingen, 2019, 221-240.
- (109) 前掲の拙稿「アーニッシュの起源——寛容思想史の視点から」を見よ。
- (110) Cf. Alexander Ames, "The Knife of Daily Repentance." *Toward a Religious History of Calligraphy and Manuscript Illumination in German-Speaking Pennsylvania*, ca. 1750-1850, in: *Mennonite Quarterly Review* 91 (October 2017), 471-510.

※本稿はJSPSの科研費JP16K03132の研究成果の一部である。